

平成三十年二月十日發行  
皇學館論叢第五十一卷第一号 抜刷

資料紹介

萩坊奥路作『西行諸国噺』翻刻と解題

速  
水  
香  
織

## 萩坊奥路作『西行諸国噺』翻刻と解題

速水香織

## □ 要 旨

『西行諸国噺』は、末期浮世草子を代表する作者のひとり萩坊奥路の初期作にあたる諸国の奇談集である。西行が源頼朝と対面した際、頼朝に請われ、嫡子頼家への教訓とするため諸国遊行の中で見聞した話を語る、という体裁をとる。これは西行が鎌倉に一晚滞在した折の逸話（『吾妻鏡』）から着想を得たものと思われるが、この時代設定のため、源平の争乱が絡む話や、年代を平安時代末期に設定する話が散在する。

全話に教訓的言辞が添えられることを特徴の一つとし、内容的には女心、もしくは婦徳が話の展開を導く話（一の二～四）、虫魚禽獸に係る報恩譚・因果応報譚（二の二～四・六、三の四）等、共通するテーマを連続して語る場合

がある。また、先行する仮名草子・浮世草子等の作品群に収録される奇談や諸国譚を再構成した話も見られることが篠原進氏により指摘される。

本書の完本は、現在皇學館大学研究開発推進センター神道研究所蔵本のみが確認される。本書の全貌は、これまでに稿者により『浮世草子大事典』（笠間書院二〇一七）に紹介されてはいるものの、書誌情報の詳細、また本文が公開されたことはない。そこで書誌情報と共に、全文を紹介する。

## □ キーワード

『西行諸国噺』・萩坊奥路・末期浮世草子・翻刻と解題

『西行諸国噺』は、末期浮世草子を代表する作者のひとり萩坊奥路の初期作にあたる諸国の奇談集である。西行が源頼朝と対面した際、頼朝に請われ、嫡子頼家への教訓とするため諸国遊行の中で見聞した話を語る、という体裁をとる。これは西行が鎌倉に一晚滞在した折の逸話（『吾妻鏡』）から着想を得たものと思われるが、この時代設定のため、源平の争乱が絡む話や、年代を平安時代末期に設定する話が散在する。

全話に教訓的言辭が添えられることを特徴の一つとし、内容的には女心、もしくは婦徳が話の展開を導く話（一の二〜四）、虫魚禽獸に係る報恩譚・因果応報譚（一の二〜四・六、三の四）等、共通するテーマを連続して語る場合があるが、その場合各話冒頭に前話との関連を示す言辭が置かれる。また、先行する仮名草子・浮世草子等の作品群に収録される奇談や諸国譚を再構成した話も見られることが篠原進氏により指摘されるが、各話の詳細な分析については別稿を期したい。

本書の完本は、現在皇學館大学研究開発推進センター神道研究所蔵本のみが確認される。以下に書誌情報を記し、全文を紹介する。

【書誌】

巻冊 五卷一冊。

表紙 縹色無地。縦二十二・六×十六・二種。

外題 「〔新板／絵入〕西行諸国噺」（以下に「一より五合」と書入）子持左肩。卷三の題簽を流用。印刷された

「三」に細工し、「一より五合」のうち「五」とする。

序題 「西行諸国噺 序」

目録題 「西行諸国噺／一之目録（一五之目録）」

内題 「なし」

本文 四周単辺。匡郭縦二十・一種。句読点なし。

板心 卷一「西行 一ノ二（一四）、〔丁付ナシ〕、五―七、

〔丁付ナシ〕、八―十」

卷二「西行 二ノ一（一三）、〔丁付ナシ〕、四―六、

〔丁付ナシ〕、七―十」※十丁ウ切取により欠

卷三「西行 三ノ一（一三）、〔丁付ナシ〕、四―六、

〔丁付ナシ〕、七―十」

卷四「西行 四ノ一（一四）、〔丁付ナシ〕、五―六、

〔丁付ナシ〕、七―十」

卷五「西行 五ノ一（一三）、〔丁付ナシ〕、四―六、

〔丁付ナシ〕、七―九」

※卷二一丁目なし。丁付のない丁は全て挿画。

※巻末に「定栄堂新版当世読本目録」二丁、『永曆

大雜書天文大成』広告半丁、「定栄堂藏板目録」

半丁を掲載する。「定栄堂新版当世読本目録」末

尾に刊記あり。

刊記 「明和九壬辰年正月吉日／大坂書肆 心齋橋南四丁

目 吉文字屋市兵衛／江戸書肆 日本橋南四丁目

同 次郎兵衛」

※「定栄堂新版当世読本目録」末尾にあり。

印記 「森山」(序一丁目の上下二箇所)に朱印)、「神社調

査部印」(序二丁目)に朱印)

所蔵者 皇學館大学研究開発推進センター神道研究所(請求

記号・七〇九)

## 注記

(1)本文中の当該箇所は以下のとおり。「十五日 己丑

二品御参詣鶴岡宮而老僧一人徘徊鳥居辺恠之以景す季

令問名字給之処佐藤兵衛尉憲清法師也今号西行

云々(中略)十六日 庚寅 午尅西行上人退出頻雖抑留

敢不拘之三品以銀作猫被充贈物(以下略)」「吾妻鏡」卷

第六文治二年八月十五日―十六日条、本文は『増補新訂国

史大系』に拠る。ただし表記は新字体とし、訓点は省

略した。)。

(2) 篠原進「怪を談ずるの」ユートピア―萩坊奥路の

位置―」(『青山語文』三九号、二〇〇九)に、本書

巻五の一「鱗崎悪魚」が『怪談御伽桜』巻二「松浦山

の大蛇」と類似するとの指摘がある。

(3) 関西大学附属図書館に、巻四・五のみ所蔵。

## 【本文】

〈凡例〉

・本文中の漢字表記は全て新字体とした。ただし、人名・地名等の固有名詞はできるだけ元の表記を留めた。

・挿画には丁付がないため、(挿画オ(ウ))として示した。

なお、挿画中にある人物の台詞は、( )内に示した。

・読みやすさのため、私に段落を施した。

西行諸国嘯 序

三十歳のむかし過しはるの花さかりなる比洛東の幽邃西行庵に羅人乾峯等の数輩よりつどひつ、誹語一万よぎんに及ぶ主人沾耳はすこぶるふうさうの古老にして月に花に恋に旅に神釈さんすいたがひにあげはこびてうらにうつりおもてにかはりて夕陽をおくり素影をむかへておのゝ数ひやく句をはきて夜ふけ会さんじてたれかれもしりぞき出ぬるに予ひとり旅途にありて主のいとふとゞめるにまかせて残りひちをまけてうちものかたらひてそこにふせり

あくる朝またきあるじは未だ(二オ)夢をむすべるに予はめさめてありけるが机辺に一塊のほうごあなるをふとさぐりあたりてしら波のうちひそめつ、袖のそこにしてかへりみるに此一帖をえたり

上にいへる雅友も追く冥冊にいりて残老のはちがわしくてあるのみなり今とし人のもとめになまずこの書を翻案してあたへやりぬよしや泉下にかの庵主のみ、をあらふてき、とがめられんもわが身ひとりのつみをゆるし給へと罪障懺悔のことはりをのべて序とすと云ふ

萩坊 奥路題 (二ウ)

萩坊奥路作 『西行諸国嘯』 翻刻と解題 (速水)

西行諸国嘯

一之目錄

西行遍歴

鎌倉のものがたり誰が後覺に釈迦も御存じないしん如夜又になる娘

相生妻夫

高砂のむかしがたりゆくへ白髪の恋智帰りさかせる老樹のはなよめ

筑紫伽羅

過し夜のやさものがたり傾城に実なしとは人くゆふけふり老人前の咸陽宮

嫉妬執念

夜ととも懺悔物語りあかしかねた二度のびつくりほんのふそくほだいしんせつな友だち

誦經功德

大悲の利生ものがたり劔なんはすくひ給へと定業はのがれぬ頓死頓生ぼだい

電神冥罰

十三年忌の死霊物がたり金神へ奉公とはびつくりのむねのふさがり母親の鬼門命の年の明方

西行遍歴

物のなも所によりてかわりけりなにはのあしはいせの浜荻いづれその国其所くにしたがひ万づの呼なもかはり人の風俗から心いきまでさまぐにき、なれぬことこそお、かんめれほしをいたゞきしもをふんて明しくらしの回国執行たびのそらにはゑもしらぬ怪異妖物にであふもま、めづらしからず茶談の種となりてわくがごとく見るがごとき口拍子にのりて蕩くことしてたへずとふたりこたへたりかずくなるなかに世人あまねくよくき、しれる西行法師といへるはもとほくめんの武士にて佐藤憲清と申せしが鳥羽院ほうぎよのときとんせいていはつして大実坊円位とあらため西行とあざなしてふるしき包をくびにひんまき諸国をはいくはいせしが比はあきならば過るに相州しぎたさはに來りて物さびしく立休らひて

心なき身にもあはれはしられけりしきたつ沢のあきの夕くれと和哥を打誦じていたるにふりよに右大將家の駕輿にゆきあひ頼朝卿の望に（四オ）まかせゆみやのこじつを伝へられけるよりしばらく鎌倉にとりうなり

嫡男頼家卿このときいまだ御やうちにましく、仙満君と申けるが夜く西行を御居間に召され諸国古今のはなうはさをさせられるは全く父君頼朝卿のけんりより出でてくはんぜんちやうあくの戒ともなり且は若君に諸こくのどうじやうをしら

せ奉らんための料に西行をおんたのみあつてのけつかうとぞ聞へし西行は関西北陸坂東なんかい渡らぬ国いたらぬしまでも無りければ壹所く風の土につうじへんぜつよとむ処なければ若君をはじめ伺公の人々かんしんよねんなく聞とれてそ侍りける西行申さる、はもろこしの尾生女にやくしてはしの下にた、ずみいけるに俄におほみづおこり大なみ天をひたすにもなをやくを守りてさらす終に水におぼれて死せり是ばかりちぎなる男かなと其比の物笑ひなりしとかやしかはあれど又やくに背きて命をおとせし例まのあたり愚僧が見たりし事実を申し上ん過し嘉応年中の事なりしに西京にこまものや伴介といふ小商人すぐれてのりちきものにて若きときよりたねんに渡世をせいにいれ

（挿画オ）へしきたつさはの図／西行法師諸国修行せられて鎌倉を一見せられしに／頼朝公に出合給へは文武の達人なるをもつてして連帰り滞留し給ふと也門前の童にねこをやられしも此時の事也／よりとも公さ

（挿画ウ）へ女の死靈など、いふ事は皆此方の心より迎へて見る也常く女のうらみたる事を思出るより出る事也僧山伏の祈るといふも転ずることなり／何やらさはがしい／エ、はらのたつことや

こがねもできて商ひさきもひろくなる事につき伊太郎といふせがれを伏見へ遣はしみせを出してさけをうらしけるに伊太郎もゆだなく商ひをあげみければしだいに手廻しよくなりけり然るに伊太郎となりおきてといふ娘十人にすぐれてじんじやうなるに伊太郎ふとなじみねんごろして末くはふうふとならんと堅く申しかわしける親伴介は此事をゆめにもしらず幸にありのこ有て伊太郎に女房をよびむかへ遣はしけるとなりのおきて此事をふかく恨みちうや泣きもだへ終にむなしくなりける其後伊太郎かりそめにやみ付けるにかのおきてが姿かげのごとく頭はれさしもとし比かはらじといひかはせし契り背きて異妻を迎へ給ふこそ心得ねこのうらみいつの代にか忘ん君をもぐしてながさまよひのくげんを見せん思ひしり給へといふに伊太郎は忽にたへいりける人くよびいければしやうきつきたる

昼夜に五六どづ、おきてが靈頭はれ伊太郎をつれ行んと、しり家内いらくの怪異た、りをなすよつてしゆげんじやを招てきとうを頼む法印だんにのぼり汗水になつていのる所におきてが姿忽せんと頭はれ法印をならみ(五才) つけて申しけるは伊太郎我と夫婦のやくそくをなして互にきしやう迄とりかはしたるちかひに背て今外より女房を入たることを閻王にうつたへおゆるしを請てかれが命をもとむるに其方なにもなればかれが肩

萩坊奥路作『西行諸国断』翻刻と解題(速水)

をもちさまたげをなさんとするやとくくかへれ帰らずばめに物見せんとねめつけるがんちう物すさまじく法印大にふるひおそれだんをころびまろび落て跡をも見ず逃帰る

後五六日過てむざんや伊太郎終に狂ひしに、死しけるまことに親のゆるさぬかくし女房をこしらへし不孝せいに背きしばち女のうらみに命をうしなひしも因果れきぜんたる物ならずや

#### 相老妻夫

夫婦は入りんの内にても父子君臣におしならんでとりわきたいせつのおづかる所にてそのしたしみ二世をかねて天情のふかきこと等閑にあらずかの伊太郎がごとくやくに背く時は女の怨しと思ふ一念こつて終に命をとる事あやしきことかと思へは左にあらざり理の当然なり

又信をまもりて変ぜざればたとへ別れていくとし過ても末には終(五才)にめぐりあひてほん意のごとくかいらうの結びあさからぬ例愚僧九州行脚のせつ阿曾の舟長が方に一しゆくせしにおつた夫は松五郎とて七十斗女房は六十式三才に見へしがふしぎの身のうへはなしをいたしける

かの松五郎は代く東国つみ荷のせんどうにて父は竹右衛門と申けるが松五郎十八才のときはじめて父にかはりて荷物をつみ出す其となりうらの亀右衛門といふもの、娘おつるを竹右衛門

かたへよめにもらはんやらんとのやくだくすみ此度のはつふねしゆびよく戻りたる上にてしうげんさんと用意をなす然るに松五郎ふねなんふうに吹ながされゆくへしれずとの便に父母のなげきたとへんかたなく亀右衛門かたにも笑止きのどくながらすべき様なく二三年までとくらせど帰らざればおつるを外方へよめ入させんと竹右衛門夫婦へも相談のうへ娘にかくといひ聞するにおつる中く得心せずかりにもけいやく済で竹右衛門殿よめに定りたるを今更へんかいせんとは道にあらずたとひ祝言なき内にも夫となづけたる松五郎殿万うみにしづみうせ給ふ共貞女の道をやぶるべきかは況やいまだ生死のほど分明ならざるをやと夫より内を出て（六オ）竹右衛門かたへ行竹右衛門夫婦もふびんに思ひ段々いさめて外へよめ入させんと世話すれ共此娘何分に合点せずおつるが両親もぜひなく唯かれが心にぞまかせける

おつるはいよくこゝろざしをけつして舅姑にくはうく他事なく其後年をかさねて竹右衛門夫婦も跡や先死はてければおつるは後家すがたにてしやうばいのかけ引ゆだんなくかないを治め居る所へ松五郎は外国へふきながされ五十年ぶりに白髪あたまをふり廻しながら無事にこきやうへ帰りければ家挙てよみがへりたるこゝちにて悦びざゞめく中にも取わきおつるが嬉さたとへんかたなく吉日良辰をゑらんで夫婦の盃とりかわしけ

る松五郎はことし六十八才おつるはてうど六十一のほんけに帰り花咲てたがいに霜雪をかしらにいたゞきてのしうげんは古今いまだ聞およばず是を相老妻夫と西国とかくの噂かくれなかりしと承りぬ

### 筑紫伽羅

女の貞烈を守ることほるんに及ばざる義にて前に申すかごとしそれが中にも色にうつり香にまよひりよくにひかれて実情なきものあり  
往んじ比筑前の国司（六ウ）藤原の嘉興といへるゆゑしき武士あり在京のつれく江口のゆうくん其原といへるにかよひなれ雲雨のちぎりあさからざりしこと三とせに及びて下国の勅くだりければぜひなくわか行んとするに其原は大かたならぬ情のより所なきに手をとりかはして泣涙ははれまなきぐれに染かへん心も知らでかこてる思ひ恋々たり嘉興もさすがにやるかたなきむねをおししづめて又此一とせをも過て大裏罷出んころしもいたらばあひ見ん事かたきにあらじ夫迄たがいにうしろめたき心ながらんこそ有たれといひ慰め置て任国におもむきける  
其後嘉興この妓にさいくはいせん料にと沈水香木にてゆかをこしらへ玲瓏とすきとをるばかりに工の美しきをきはめうすもの、はなやかなるにしきのかざりせる衣幾かさねともなく数の



ひつにおさめ三年を過て五月の末にさんだいをとげ公務のさしつどへるをとりさばくこと十日あまりへて後の妓の心を引見んため嘉興こそ国法をそむき親のかなたを得國人にうとまれ所を去て忍びて都にすむなる浅ましな人として云はせ今はとて江口のゆうりに(七才)きたり

大門口をひとすじに局くを打通りかの妓婦のあなる所に至る其原むかふよりきやくをいざなひ来る道に嘉興行あひひかにやといひかけんとするに其原はかほをそらして行過ぬ

夫より嘉興いつものあげやにゆき其原を呼ぶにとびくともせずや、しばし有て来る嘉興持せ来りし調度に白銀をとりそへて土座に遣りければ其原はじめてきげんを直し久しゆかしの情を訴ふ嘉興は二かいざしきに至り兼ねて拵へおきたるゆかをたゝみて長持いれ来れるをとりよせほくを呼んでとり組せけるに五間四方の大ゆかことく沈水香木を用ひてもじのすかし真紅のかざり流蘇有びれいことばにのべがたし嘉興は其原が手をたづさへて牀にのぼる時あまたのゆうくんきたりうごかし酒肴のかうはしき席にみり

遊宴半酣におよぶるとき嘉興こへをあげて其原をゆびざして申しけるはけいせいにもことなしとはいへれども世に情の道のわりなきは多くは青ろうにこそあなれと去る好士のいふめるにひ

萩坊奥路作『西行諸国断』翻刻と解題(速水)

かれ千金

(挿画オ) 高砂のめでたきためしは老たるまで夫婦替らずおつとまめやかに妻真なるを公表したるなるべし/これ

はくふしぎのゑんじやのふ/さてもようまめでいて下さつた)

(挿画ウ) 色里の習ひ世に時めくに随ひ世におとろへたるを

いとふ其中に心いやしからずいさぎよき女もあるは遊里のはんじやうなるべし/けふはいこうあた、かな/これからどこかよかるふ/たしかにそのたゆふ

じやは)

をおしまずして一笑を買ふに飛鳥川のふちせとかはりゆく月日もわづかに三とせの内とうわのそらになりゆくぞうたでけれど且いかりかつなきて僕に命じてもたせ来りし長持をとりよせ中なる小袖のこりなく取ださせことくひきさき木槌をもちてかのゆかをうちくだきて小袖と一所に山のごとく置いて火をかけてやきすてけるにほのほけふりに空にみち異香四方にゆきわたり十日計がうちその匂ひやます皆人おどろき群集をなして見る事市のごとく是をつたへて筑紫の伽羅といふなめり

嫉妬執念

とりわきてつ、しみおそるべき女の大事はしつとの姦きなり

中比土佐郡司貞美といへるは愚僧がほうぐくはいの友たりしかるに貞美はらんぶに妙なりしかば花宸月夕幽縑のいとぐちをさぐりてかがくのあやをなしける

此四年さきに貞美が妻ぶら／＼と煩ひしが終に空しくなれりけるにその日は酉の日なれば俗せつにまかせ出葬をいむ日なりとて送さうはゑんいんすべしと沐浴させてくわんに納め一間なる所に直し香花（八オ）とししひをてらして夜と共にまもりける愚僧日ごろのこんいと申しことにしゆもんの事なれば別して世話いたし遣しその夜も貞美がときして有けり棺を一間になをしいれふすまを立きりて次の間に貞美愚僧さし向ひよもすがらなるたへま／＼まめやかに物語して夜を明さんとするにうしみつ過る比にやたてきりたるふすまおのれと三寸ばかり明よと見る内に一間よりなにやらんでんくはうのごとく勝手のかたへとびゆくと思へしが女の声にてあつと一声さげぶととたんにそのま、でんくはうのごとくもの一ト間にいりふすまもものごとくしまる

しばらくして貞美申す只今のを御覽候や愚僧いかにも其通り也とこたふ貞美さらば一間を改め見候はんと愚僧ももにてしよくさして一間に入るにくはんおけのふた少しにちりあるをひらきみればつまのしがいい女の生首をいだきてにらみつめいたるていにぞつとする内貞美ちやくとふたしてさらぬ風情にて一間を

出夫よりかつてへゆき見るに下女老人ふせりいるまでにしてな

んのかはりし事もあらず

扱兩人とも（八ウ）むごんしてもとのざしきに直り吐息のみして互にもくして半時ばかり有けるが貞美申出しけるは扱／＼貴僧へつけてはめんばくなき次第なり我妻しやうとくしつと深くふだんに下女をしへたげ此度の病中にもしごうねたましきていに見へ候ひしがさだめてそのしうねんにひかれてこそ候はめ貴僧とは断金の中なればなにかは包申べき御他言は候まししかへす／＼かれが罪悪とくだつのこんぎやう頼み申すと打しほれぬ愚僧もあはれにたへず何が扱御心やすかれよ人にはかたり申まじ又じゆきやうの義は心のかぎり御系かう申さんと経巻のひもをととき高らかにとなへける内も又もやいかなる怪異か有らんと心さらに休らず又半時して貞美今一応棺中をあらため申さんやといふともかくもといひければ少しはそこきみよからずてしよくさげて一間に入り棺中をひらき見れども有し女の首もなくもうじやも閉眼してよひにした、めおけるま、なり愚僧しゆみほんのふそくぼだいの心を傷して

（九オ）

秋風に吹れてまよふうきくものはれゆく跡に有明の月

都てぞ夜を守りあかしける其後聞ば此下女七日の内にやみつきてかかねつはなはだしきゆへいとまを出されけるが又七日過て下女もはかなく死しけるとぞ大道心の西行がこわかりしといふ

たは咄し上手のいわれなりと一座のわらひどよみとなりける  
となん

誦経功德

かの貞美が妻女のぶつくわのたねにはだいじやうみやうてんを  
ひもときぬすべてどくきやうのくりきにはむりやうのあくねん  
をせうめつしつきては釵なんをのがるゝゝとくある事刀刃だ  
んくゝゝの文おもひ合すべし

むかし平家よざかりのとき院別当能勢兵衛家兼が弟九郎家直  
といひしははくがく多才のきこへ高し

あるとき清水のくはんおんにさんらうせしにくはんおんゆめに  
ちげんしての給はく汝がじゆめう限りきたりて今月を出すと也  
家直つゝしんで承りそのゆへをたづね奉るくはん（九ウ）おんの  
給ふかならず死刑におこなはれんかと家直いかゞしてまぬかれ  
候てんと申せばくはんおん重ねてせんせのがうゝゝん定る数なれ  
ばのがるゝ事あたはずといへども今そのかなしみの切なるを不  
便に思ふ間死はせひなければも痛苦はまぬかれしめんとふもん  
ばんをさづけ給ふ家直ゆめさめ信心きもにめいじ夫より毎日く  
はんおんきやうをどくじゆする事おこたらざる有る  
其比保頼俊寛ら平家をかたむけんと鹿が谷にてみつじの会合  
せし事頼れ家直が兄家兼も一味どうしんの間へありて其事に誅

萩坊奥路作『西行諸国断』翻刻と解題（速水）

せられぬ弟の九郎家直もきうめいに及ばれ六波羅にめしとられ  
すでにしけいに極りぬる夫の夜病氣つきて頓死しけるこそふし  
ぎなれまことに大悲のめぐみにより経をじゆしけるくりき空し  
からず死罪にあはざりけるぞありがたき

竜神冥罰

信あればとく有て罪惡のともばらついにその苦みをのがれず  
といへどもしはらくはぶつしんの加被力によりてのばはる事あ  
りと見へたり

加賀の敷地といふ所に四郎（千オ）兵へといひける者死して十三  
年になりけるめい日ついでんゆふくれ第三ばんめの娘此時  
十五才にていまだゑんにもつかでありける此娘に親四郎兵へ死  
霊つきて申すは我今はこのじんの下部となりてよほどあのほう  
がくのかつてを覚しが我家には大なるつみありおゝくの子供を  
もてるにようせうな時より小便たごをふりかへしあるひは大  
小便をして手をあらはずそのまゝ、かまどの前によりけがす是  
によりてかまどのかみ毎月晦日に天帝へうつたへ出られすでに  
去年じゑきのはやりし時家内のこらず煩ひ死すべき所を仕合と  
御きとう御ふうの御かげにてたすかり朝夕しんくするくどく  
ぜんごんにより少しは罪障とけたる様なれ共かまどをけがし  
たるとがはそなた達が母のそだてがらの悪き身にきれいずきす

るきりやうがないからじやとの評判にて母が命もはや二ヶ月を  
限り也と告てそのまゝ死霊はのきにける

げにもいひしに違はずふた月ありて娘の母卒中風をやみつきて  
死したるぞふしきなりけらし

西行老之巻終

(十ウ)

### 西行諸國嘯

#### 二之目録

善行報恩

王代のむかしはなし親に渡し場のまよひ見命たすか  
つて祝ひことぶく百才の老翁

放魚陰徳

舟中の盗人はなし慈悲の網にもれぬ仕合はよし葦原  
のこさうどう

夜鶏返謝

殺生をとめめた在所の咄しつらのかわのあつもの  
鶏メのない卜算がふしぎの命

船頭難波

銀をひらふた子供の咄し落したは早天の恵みをえた  
る財布のたまもの

貪婦雷死

雨やどりの女の咄し預つた物をあつからぬとゆふ立  
のはれまを待ぬ親子が命

円夢禁忌

酒宴のうへの夢咄しよこにはゆかぬ蟹の判断進物を  
うけて流すも放生会

〔二行空呂〕(一ウ)

善行報恩

仁は万善の帰する所にしてしやくぜんの家にはかならずよけい  
ありと承る

王代のむかし西国せいばつの事ありて紀朝臣昌利といふ人都を  
しんはつありて播磨路をげかうありしにそなるみちのかたは  
らに九才ばかりの小児たゞひとり立てかなしみ泣いたり何者の  
せがれにやと尋るに越後のなながしか子にて父なるものぐして  
当国加古川をわたらんとして道にて多くのつわものつきあいき  
りむすぶに出合ひ折を見合せてよけゆきてんと父とともにあそ  
ここゝとぬけつくゞりつする内とやかくのまぎれに童ひとり道  
にはぐれて此仕合なりといふ

昌利あはれにも不便がりてしよくじなどかたのごとくいたさせ  
郎従を召してこの児が親なんあり所をたづねくたしかに手渡

しかへし遣はせよと申し付られ(二)ければかしこまりて児をつれて加古川へ尋ねゆく道へ切たうしある死骸しうおうにしたり何かがのりけるふねをたづね帰しやりければ父は一子をとりのしなひうれへもだへかなしみ有ける所なれば死したるもの、よみかへりたるごとく悦び手とりて船中へのせたることの子細かのおくり来りし郎従の申につけ大にかんるいをながしふかくその厚恩を謝してふしおがみ有がたがり郎従に酒飯をもてなし引出ものなどして帰しける

此とし昌利の父昌義六十一のほんげなりしが重病をうけて命あやふかりしに夢に朱き束帯したる神人きたりあらはれ給ひなちが子の昌利まよへる人の子をかへせる仁愛の善心をかんにて汝がことぶきことしより三十九年ましあたふべしと告げ給ふと見て大病すみやかにいへたりし果してそのつげの詞のごとく百才(二ウ)のてんじゆをたまち昌利あいづゝいてことぶき長き事を得て子孫ながくはんじやうせりとぞ

放魚陰徳

尔に出たる者はなんちにかへる報応の理はてんせいしぜんにして人はもちろんきんじう虫魚のいまで其おんぎをかんずる事まのあたり愚僧が聞及びし奇事あり

萩坊奥路作『西行諸国断』翻刻と解題(速水)

過し比いなか通ひの商ひする清兵へといふ者堺の浦辺を通りける時りやうせんあまたこぎつれてゆき来ふなかに目の内四尺あまりもあらん大なる魚のあみにかかりたるを見て清兵へなにとなく不便の心おこりてやがてそのふねをまねきりやうしを呼かけ此魚をかはんと云ふりやうしの申すにはこの魚はちと心あてが御座るされど今御望みと御座らばねだんしだいにうり申すべしとてやがて銀子廿五匁のあたいをこひけるを清兵へいろく様へと云ひあつかふてやうく十八匁に直なしてこの魚をもとめすくさま(三オ)おきへはなちやりて打通りける

其年の夏清兵へ同じ仲間のおきんと三人申し合せ小ふねをかりきりて西国へ下る思ひいれありておのく金子三四拾兩つもち堺おきを乗る時夜にいりかぜあしければふねをあし原のなかへ入れてかゝり居けるに夜半も過るとおぼしき比海賊八九人くろきやうの者共せんちうへおどりこみおびやかして金子をばひさらんとす三人心得おきあがり組んずころんずもみあひつかみあひけるくらがりの事なりければたがいにくぐりあふてめつらみせりあひせちがふ所にたちまち水のなさはぎ立てなにかはしらず大なる魚いくらともなく船の中へとび入飛びいりひれをふりおどりこみはね廻れば舟是がためにかたぶきくつがへらんとするに盗人共大におどろき是はそもいかなる事にやとあはてふためき足のふみどめもなくひよろつく所を三人の者共さぐり

よりて得たりかしこしとおさへつけくつみに盗人らをのこらずく、りあぐるさてくらがり (三三)

(挿画オ) 道にてはぐれる童へこそいたわしき者なれ王昭君の故国二捨られたるよりも心の内便りなかるべし是を知る人の方へこそ、ろをそへて遣す人こそ仁愛なれ  
／＼いやしからぬものそふな／＼これはまよひこそふな  
所は何といふぞや)

(挿画ウ) 殺生はずまじき事なれわづかの虫けりまで命をおしむこと人間に替らず魚など放やりて徳に報ひたる事も少なからず／＼やれひけく／＼よい見せものしや  
／＼やれたすけて下され／＼さても大きなものいけをひては／＼じゆうになるまい)

にても、あいろわからねばいかせんかつぶやくにかたわらにありけるうろ舟に人音のたかくとかまびすしく聞ゆるを幸とゆきて声をかけ火をもらひけるに此ふねにも盗人入りてからめとり有ける三人の商人はあやふきなるのがれける魚はしきりにおどりはねて皆く水そこにいりさりぬ

かゝるさうどうの跡なれと舟申なにとつそんずる事なしさうどうといひ小ぶねの事なるにすこしもけがあやまちなかりし事ふしぎなりとぞ申しける盗人共はあやまりいりてわびけるゆへ所へうつたへ出るも用事のえんいんなると申しかれこれむつ

かしければそんなしつのなきを徳として放ちゆるし遣しける後につくくおもひまはせば前に堺にて命をたすけやりし魚の恩を思ふて徳にむくゑるにうたがひなしとぞ申しける

#### 夜鶏返謝

たゞ魚のみしかるにあらず鶏のなんをすくひしためし越中の郷分にくらなしいやありてまんきんの在くをはいくはいしける占ふ所はなはだくはしからず吉凶をいふもめつたな事にて多はあはぬがちなるゆへ大放乱説とぞ呼びける

ある日たま一家のかたへゆきけるに折節ちうじき時分なれば幸かいはるとりをりやうりしてあつものにしてふるまはんとありければらんせつしさいらしくこくびをかたぶけ思案するていにてゆびを折かぞへなどしていやくあゝの鶏をころさるゝ事は無用になされといふていしゆうちわらふてれいの御かんがへあたり申まじぜひにたき申さんといふ時乱説は真顔をつくり頭をふつていやく今日のは常に申すと各別のかんがへにて相違なし必すうたがひ給ふべからずあの鶏をころし給は此一在所のこらずしやうしつ致すうんにあたりますと得手かつてに精進日をさいわひにせつしやうをとめけるをまことしからずはおもひけれともすこしは又きみのあしき(四ウ)にひかれ鶏をさく事をやめてあり合せのやさいにてもてなしとやかく

する内にくれに及び雨もそぼふりければ乱説をとめて一宿さ  
せける

いづくにても在所のならひよひのあいだは内庭にむれてうたひ  
つれて米をうすつき仕廻へば其きねをうつぱりにかけおく事な  
り此家にもその通りうすつきはて、そのきねをとり置くうつぱ  
りはすなはち乱説がふしどのうへなり乱説は何の心もつかずふ  
せりてまじろまんとするとき夢ともなくうつ、ともあらず昼庭  
にて見たりし鶏来りて乱説があたまをつ、くにおどろき覚  
て聞きながら鶏をおふてねふらんとすれば鶏又来りてつ、くかく  
のごとくする事三度におよびければ乱説もやかましさにたまら  
ずおきあがりて勝手へゆき火をもとめてにはとりをおはんと見  
廻すれば宵にねたる所ははなれてはるかの脇に乱説がねどころ  
ありてそのふせり居しねぐふすまの上枕のあたる所へ（五才）う  
つぱりくちてかけありしきね落てあり宵のま、にふせりいたら  
ば乱説があたまはみちんにうちみしやがれんに命みやうがに  
かなひしと悦ぶ事をおもへば昼りやうりせんとあるをひたすら  
とめて命をすくひし恩をかへしける鶏のおかけであやふい命  
をひろいける

船頭難波  
せんとうのなんしやう

鳥や魚やさへその通り恩を知り道をまもるからみれば人はもち

ろんなをさら義をおもひ利をいやししみ一すじの毛もわがものに  
あらずんば取りかすむまじき事なり

さいつ比兵庫福原の新都しばらくにぎわへる時兵庫の町に菊  
屋孫惣といへる者の子に孫吉とて十四才になりけるが毎朝と  
くおきて氏神へさんけい致す事おこたらずある朝参話のみちに  
て財布をひらひとりと持帰りひらき見れば西国問家のかわせ  
手形しかくくの当名ありて外に銀子五百匁有けるを見て父  
に（五ウ）此よしを語り見せければ孫惣つくくとながめいたり  
しが孫吉に申は此銀子をばはまがわの市場名書の所へもちゆき  
て拾ひしづうを申してわたし遣はさんと思ふや但しは此ま  
とめてとらんとほつするや其方の心にはいかゞ思ふぞやと問  
へば孫吉申は市のかわのながきのしやうもん慥なればその家へ  
持ゆきわたさでは叶ふべからずなにしに宿にとゞむるの理あら  
んやと申しさまにとつてかへしはしりゆく途中にて舟頭らしき  
男帳を肩にかけうろくと眼ちばしりうるみて物おとしたる  
躰なるに行あふ

孫吉声をかけて此男に申すは其元にはなんぞおとしてゝはない  
かと問ふ舟頭申はなるほど其通り我等西国舟の舟頭にてはまが  
わ市ばのといゆへ国かたよりかはせ銀をこつばかり参た所に今  
朝あまり早く参りて折あしくせりもの、最中にである間氏神の  
社へ参りしばらく待合す間右の銀の入たるさいふを枕としてと

ろく致す内覺へずふかくねいりてふと眼(六オ) あきておそな  
はりしと取りそぎけるまぎれ財布を道にておどしたるか置忘れ  
たるか見へざれば立ちどろくどりのやうにせんさくすれども見  
たといふ人もなく市場のことなれば諸方のいりごみいづかたの  
人にひらひとられたやら雲を当にするふなしやうばいは致せと  
誰人のひらふたといふ事はあてどない是非なき事ども也と悔む  
を孫吉聞て是くさづかはれなその財布我かたにひらひありこ  
なたへ御座れと舟頭をつれたちかへり財布のもやう銀高問やの  
当名万事内をあらためるに舟頭が申すに相違なかりければやが  
て手渡しすれば舟頭は命をひらひし心地にてな、めならず

悦びあつく礼謝して帰りけるが其おつ、けに舟頭礼に生鯛をも  
ち来りて贈りけるを夕かた料理せんとしける時鯛のはらより財  
布をさぐり出し内を改るに金沓歩かず五十切その余に銀小玉八  
十斗りあり是ししながら陰徳のれいおうあらそはれざる事共

(六ハ)

(挿画オ) (物を落せしものは何にてもいかに斗りのなんぎ命に  
かゝるべき事もしれず是を返やるこそ賢人君子にも  
おとるべからず／たつねさつしやるは／これではこ  
ざらぬか／さて／ありがたいいこうなんぎをいた  
していた)

(挿画ウ) (女は心のかだましくおろかなる物なればわきまへ

も無くよからぬわざをもなすもの也親夫とたらん者  
常に道をおしへさとするべき事なり／にはかあめてご  
なんぎでござんせふ／このひやうをしばらくおあづ  
け申ましたい)

なりと人みなかんしんいたしあへり

#### 貪婦雷死

正直を守り候へばかならずぶつじんのかんおうありてふしき  
の福をあたへ給ふ是理のとうぜんにして兵庫の孫吉がごときは  
なり又ひどうにして他人のもの我かすめとりて遣らぬのみなら  
ずかへつて無難なる事をいひかけなんどするやからをば天かな  
らずこれをばつして不慮の死をいたす事れきぜんたるものなり  
和州五条と申す所に十才ばかりなる娘をひかへたる後家あり春  
のころにわかあめふりけるととき幼児をいだきて三斗あまりの米  
をせおひたる女来りてはれ間待ほどの内こ、におかせて給へと  
むしん云ふて内にいりやすみ居けれども雨はしきりにつりて  
いつやむべしとも見へず

あるじの後家申は此大雨に米をおひ子をつれては中くいなれ  
まいがなんとまあその米は爰にしばらくあづかり置ん間まづそ  
の子ばかりつれていで、又一かへり米をとりこられた  
がよかるがのと心をつくれればかの女は後家が心にわたかまる一



もつありとは露しらず成程あふせのごとくいたしませふよくこそ御氣つけられて下されし然らばすこしの内米をばおじやまながら爰におかせて給はれといふなにごさてやすいことをと答ふ女いとうれしげに米をあづけ子をつれていそ〜として帰りやがてして夫らしきがとりに来りけるに後家申すは此方にかつて米をあづかつた覚へなし夫はさだめて門ちがへか思ひわすれなるべしとちりもはいもつかぬ言ひぶんにも夫もせんかたなく帰りが後に又前の女取りに来りけれどもしら〜しくけんもほろ、に米を預りしおぼへなしといひはり後〜はあらぬ言ひかけするといがみか、れどもついかりせめにあつけ置し事ゆへ何ひとつ是ぞとしやうことすべき様なければしほ〜となく〜立かへり夫にかくと告るに夫殊外りつふくして女房をちやうちやくに及ぶ

その夕かた女房氣(七ツ)をのぼして首しめて死しければ夫はなはだ悔みなげ、ともひんかの浅間しさすべき様なくその通りにしてやみぬしかるに其夏大ゆふ立雷なりはためくことおびた、し後家が娘こはがるゆへ母がふところにいだきてふつぶしに成りて有ける上かみなりおちかゝりて親子ともうたれてやけうせけるとなり報ひの程ぞ恐るべし

円夢禁忌

一寸のむしにも五分のたましぬとは下さまのいやしき世のたどへに申しならはしぬるが誠にいきとしいけるもの皆それ〜にからだ相應の心魂ありて生をねがひ死をおそる、事人がいにかはりなしされば仏もせつしやう文を五戒の第一と説給ふとかや四五年もいぜんのことなるが大友大式が家臣笹林平とて八嶋壇浦にて度々ぐんかうをあらはしけるゆへ大式も他事なき者に思ひちやうしけるある時旧友片岡何がし林平亭へたづね来りけ(八才)れば笹もつれ〜に有りし事なれば能こそ参られたれと悦び讃岐より至来せし海蟹拾貳枚を煮てさかなとし酒をす、めおはらんとする所へおなじく松浦何がしといふこほうばいふと訪らひ来りければ亭主きけんよく一座にともなひしやうしける時さかなはずでにくひつくしぬればあらたに美肴を申しつけ又もすはいをめぐらし心とけあふ中の閑談四方山のものごたりに時をうつす

きやうにじやうして松浦申し出しけるはそれがしやせんおかしき夢を見たり誰ともしらす十二人の者出来りてしほ〜として某に申すは我〜はもとかつちうの土にて名を秋水の里にはせ候ひけるに思はずも今とらはれの身となりすでに火ぜめのなべの底におちいりついにはよろひもちぎれ胃もくだかれ五たいつゞける所もなくすだ〜になりてうしなはれんとする間明日

はやく竹よのもとにゆき給ひて我くどもがきうなんをすくひ  
呉られよといふ（八ウ）十式人おのの姓名をなのりけるが  
寿永元曆の比討死せし扇藤実成をはじめ平家のさふらい等  
なりしが余はおくわすれぬるがその中に各がたにもかね  
てぞんじあひたる嶋村何がしもありしといふ林平聞てしばらく  
もくしてありけるが横手をはたと打て大きにおどろきしなした  
りおそかりしぞんねんなりとたんそくす

兩人はいかなる事ありて斯はなげかれ候やと問へばこたへにさ  
ればの事に候へ口今松浦氏の御夢ものかたりのていをつくぐ  
かんがへ申すにかつちうといふは甲虫にてすなはち蟹也竹世を  
あはずれば某が性「ママ」の笹といふ字なり十式人とあるも今日  
蟹十式をあつものにせしいわれなり早く給はりたらばなに  
しに包丁仕らんおもふに篠原の実盛北国の嶋村をはじめ西国に  
て戦死の平族今かにと生れかわりて平家があるひは実盛がに  
嶋村がになど、世に申しふらし候しようけ給はりぬといへば兩  
人もさてはとその詞にふく（九オ）せり  
それより笹林平事かにゑびのるいをたちて一生くはず人の食す  
るをもいけんしてやめさせけるとやはるかほど経て外方より笹  
林平へかに十とうらいせし事有りしたちものなればことばをの  
べてかへさんとしけるが我これを受ずんば又外方へ送りやらん  
しかればつゝに誰家のなべの底のくるしみをうけんもしるべか

らずと思案をめぐらしきなく礼謝してじゆなふし終り扱かに  
をば小舟にとりのせ長き川水のながれにはなちやりけるはしゆ  
しやうなりし志なりけらし  
（九ウ）

（本文に続き「高砂百人一首錦文庫」の広告あり）

### 西行諸国嘸

#### 三之目錄

自身敵討

遺言の通り犬になりし噂貪欲の身のなり果は死での

かわみづ罪のふかみへとんぶりこ

枉死城信  
教訓をことづかる士の噂頓死はあのよのはや飛脚

びつくりのはづみに生きかへる地ごくまはり

業売恋婿

舟頭の生れがわりの隠居の噂三人の娘はいんぐわの

先がけ老僧のきやう化も夢のよの中  
（一オ）

即身即牛

朝せん牛を似せもの、噂名代にのむ子供も同じ宿業

しほからいよわたりの報ひ

死者尋問

朋友のよしみを捨ぬ噂めいどのさたも金しだいなる

浮世ぼうづにむやくのとき非時

同郷所縁

仁心ある国司の噂つゝるにこぬみたちへ推して参る老人が夢の告を申し上た子供等も不思議の目見 (一ウ)

自身敵討

人死してきんじうに生をかへるもそのがういんによる所にしてあるひは鳴村がごとく此世からしゆらどうとうじやうをこととする縁によりかぶとかにと生れ来るまことにげんさいの果を見てくわこみらいを知るの断り思ふべしきやくしゆうそくほうとて生れおちると前生の事は知らぬがぼんぶの常なりしかるに前世の事をよく知るものはほん悩の犬にしてふんぬの余りなどに出るものなり

愚僧まのあたり見及びたる事跡あり美濃の庄館に藤谷兵へといふ者けんいをもつて課役を懸村中をはたり取るその郷に愚なる民でんぢあまたもてる有是がはたの麦じゆくすれば麦を取り米出来れば又むさぼるそのほか糸綿布帛のいまでも法にすぎて法をたて、取りむきけるゆへかの者兵へが毎度のもどめにあきはてうらみ苦しむ事日々にはなはだしく (二オ) 終に病氣となりて死なんとする時我死ばかならず悪犬となりて藤谷をかみ殺んとうらみの、しり云ひ置して空しくなる

萩坊奥路作『西行諸国断』翻刻と解題 (速水)

此者はふだんくろづきんに洗染の布子をちやくしこんぞめのたびはきて居けるが死して半季たつやた、ざるにむすこ外より小犬をもとめ得て帰るを見れば、頭黒く身の毛はきつねいろに足先は黒し是まつたく父がざいせのでたちの毛色にてはたして犬に生れかはり来たると言ふことに心はつかで息男は父のゆいごんをも忘れたりしがこの犬日あらずして壮んに大になれりかくとも知らず兵へいつものごとくかの息男かたへむさぼりに来るその声をきくや否や此犬おどりで兵へにはしりか、りこむらにほかとくらひつきいかにはなせどはなれすなぎに及ぶ折からあるもの言ひけるは水に入れば早速に放すものじやおしへける其詞にしたがひ兵へはくわへられながら犬共に川水の中につかりけるに犬は兵へをくわへふかみへ引ずりこみけるがとみにたをれて死しける

枉死城 信

その時に (二ウ) いたりて家内も扱てはせいごんの通り犬となりて自らあたをむくひけるよとはじめてさとり知りて兵へが死がいは宿へをくり犬うづみほうむりてしるしをたて跡ねんごろにとふらひけるとぞ

若殿原いかに愚僧が物がたりを聞かれて扱きくはいにあらぬ事のみ申すとさぞあざけり笑ひ給はんかたも多くあらんなれども因

果報くわんぱうの道理だうりと申ものはのがれてものがれざる事にこそ候へ  
さてかの閻羅王えんらかうの事まのあたり浮うきたる事にあらざる子細しさいをか  
たり聞きせ申さん御前ごぜんをはじめ奉たまり各おの々おのにもき、得あ給おのひて己おのを  
つ、しみ道みちを守る事かへす、忘れ給たまふな

去年こぞ薩州さつしゅうの郡司ぐんじ長沢ながさわ郷左衛門きょうざゑもん鎌倉かまくらにて頓死とんじし二日ふたひばかりしてよ  
みかへりし事ことみな御存ごぞんしの所なりその、ち長沢ながさわ人ひとにかたりける  
を愚僧ぐそうも傍かたわらにありてき、はべりし郷左衛門きょうざゑもんはからずも急病きゅうびやうお  
こり空からしくなりけるが須臾しゆゆにして閻羅王えんらかうのまへに(三才) 至いたる王わう  
の曰いは御ご迎むかいまだ定業ぢやうごう来きたらずすみやかにしやばへ送りかへすべ  
しさいわいかな今鎌倉かまくらにての即死そくじなれば京鎌倉きやうかまくらの四民しん共ともへこと  
づてを致いたさんよくたつしられよと鬼卒おにそつに申まをつけ一つの城中じやうちゆうへ  
つれゆかしむ郷左衛門きょうざゑもんは所にいたりて城門じやうもんのがくをあふぎ見  
れば枉死わうじ城じやうとするす

鬼卒おにそつ郷左衛門きょうざゑもんをみちびいて所ところを見せけるに多おほくの餓鬼がき舌した舌した  
尺四せきしよ寸引すんひきのばし引ひだされくるしみ活いける是こゝはいかなるつみに  
てかく舌したをぬきいだされたるやと問とふ鬼卒おにそつが言いははししやばに  
て首くびく、りメたる者もの共にて毎日まいにちくその首くびく、りしこくげんに  
はちうにぶら、さがりくるしむ又またある処ところに身内みうちのにくこ  
とく、くふくれきるものづぶぬれになりてふるひおの、きいる  
がきあまた有あるはいかに彼かれらは身みをなげて水みづにおぼれ死ししたる  
者もの共とものなれるはてなりかしこを見ればあるひは頭かしらなき者もの又またはの

どぶへをかききりある所には目鼻めはな耳みみ口くちよりながれいづるちしほ  
にくるしむ男女なんにょはもろくの刀難たうなん毒殺どくごころ又またはしん (三才)

(挿画オ) 頓死とんじしてよみがへりたる者もの極楽地ごくらくぢごくのこを見  
たりけると語かたこれ常とこく思おもひ居ゐたる処ところは夢ゆめの如ごとくに  
見たるなり是こゝによつてか、るところ皆みな同じおなじからず、  
志こゝろありけるをとこじや、しやばへかへつてものがた  
りせよ、ありがたふぞんじます)

(挿画ウ) 智ち養やう子しなどせんには金銀きんぎんにか、わらず心の正ただしき  
を撰えらべし心正しんぢやうしくは氏系うぢけい図ずいやしく共家ともけをたもつ

もといなるべし、こなたがむこにもらひたい、とふ  
やらはづかしい、これは御ごなぶりなされますな)

ぢう相对死たいたいじのるいにて毎日まいにちその時刻じやくになればしにきは所作しよさを  
していたみくるしむとなり

あはれに浅間あさま敷し居ゐけるにかの餓鬼がき共とも一所いしょへよりて申事まをこそふ  
びんなれ我われく、しやばにてひんくあくぎやく又または不義ふぎいんらん  
のすへつまりがたきに行いあたりよしやながらへてうきめにあは  
んよりはと身みなげくびく、りじがいどくがい等の無む分別ぶんべつをおこ  
して死しぬはた、一ひとおもひのくつうなりとのみ思おもひちがへてよ  
うがうの長ながきか、るくるしみをうけんとは露つゆわかまへしらざる  
ぞおろかなれたとへ今いま千せんたび百ももたひほそをかんて悔くやみうらみて  
もせんなしとて大おほ声こゑをさけびて泣なく、かたりあひけるを郷左衛門きょうざゑもん

門いとゞあはれなる事に聞なし鬼卒きそくにむかひ申けるは是らのもがらもまたかさねて人界じんがいにしやうをかはる事を得んやと鬼卒かぶりをふつて中々ちゅうぢゅうならぬ事なり凡そ閻羅殿えんらだんにていぜんしやばに生をたくして人とむまる、者十人が十人ながら善人ぜんじんにはならて諸人をだましいつわり者となる事にてめいどにては閻王えんおう（四才）生をかへさせんと思し召めす一ばんの恩を忘れしやばにては父母人となさんと思へる乳ぶさ三年のとくにそむく世間の人のわざはひかひになるをもかまはず得手えてかつてにみがちなる事ばかりを工たくみ公事こうじみやにかゝりあるとあられぬ非義非道ひぎひだうよこしまな事にいく年かく月日をついやし近所きんじよつきあひ組中くみぢゆうになんぎをかけ身をそこなひ主親しゅおんを苦しめしんしやうの成る果はめつばうに及ぶに至るゆへ閻王は此ともがらを取りわけにくみ立腹りつぷく有てちくしやう道又は此城中しぢゆうぢゆうに入れ置て人身をたやすく得さすべからずとさいだんある事なりとながく物語り國中残りなく見せ終り立歸りて又閻王の前に至りかくと申し上る

閻王郷左衛門につけて曰はく前に言へることく御辺ごへんしやばに帰らば京鎌倉の諸民しよじんに此おもむきをくはしく申し聞され心中首く、りみなげしゆくの無分むぶん別死べつじをいたさぬやうにす、めていけんあるべしと大なる声にて前なるつくへをはつたと打けるくはつたりの拍子ひやくしにびつくりして蘇生よみがへりぬと云々

（四四）

#### 菜売恋婚なうりこひけむ

まへにも申すごとく死してふた、び此世に生れ来るは前生のつみをこのよにてめつせんが為にこそあれ

さんぬる比菜ひなをあきのふ武介といふ者ありにうわなる人品じんぴんにてしかもりちぎなる質かたぎなり毎日杉や林蔵といふ者の方に来りて菜大こんをうりける林蔵年七旬しぢゆんに向として男子なんしなくして女子三人もちて家ほとんが富り

なうり武介来たる時林蔵やどにあればいつとても代物を遣つかはしるすなれば女房出てしばらく待まちれよと林蔵帰かへり来ればさつそくに告て代錢をやらざといふ事なくいつとても留守留守なれば内へ入てやすんで歸りを待れよといへども武介は必ず門外かどらひにためらひゑんりよしてかつて内へ入らずそのうかゞひさぐる事のていねいかくのごとし

かくて二年あまりになれども終つひにかるくしく内へ入らずやうぎに見へければ林蔵女房ある時ふと武介に尋ねけるはこなたの家内はいくたりくらさるゝぞと武介申すは私事しじ両親りやうしんも過行（五才）兄弟とてもすくなふして叔父武兵へと申す者のかたにかり居申すと聞て林蔵女房なんと物はだんかうじやが此方こなたの鞆たもとに成てくれまいかといへば武介びつくりして我等ふぜいは日くらしの者が何とてつりあひ申さんと笑へば女房夫それはがつてんたり何卒なにとぞおち御と相談さうだん有て給はれといふてやみぬ

武介は帰りておぢに此よしはなせばおぢが云松屋は家持にて身上はなはだとみさかふしかるに其方ごときのふうらいもの同前なるをいかでか髻に取られんや夫はその方をなぶりてのたわふれごとならんさなくば若殿の身代など、しばいで見たかくならんとおぢ甥手をたゝいて大にわらいける

其後又ある日武介あきなひにいつものごとく松屋へ行しに林蔵女房申すはいつぞや申たるえんぐみの事いか、してへんじ致されぬぞと問ふ武介笑ふて其節も申した通り私ふぜいと御なぶりのたはふれことをの給ふにやと打笑ふ女房重ねて外くの事とちがひえんだんの事になににたはふれをいはんやしんじつにさういなし帰られておぢ御と相(五ウ)談有て給はるへしとあれは武介帰りておぢに委細をかたればおぢも美しからね其次の日武介をつれて松屋へゆき私甥是なる武介を内かたの髻さまになされたきと候よしよもやとはぞんじ候へどもいよくお違ひなく候事にやとのべれば女房立出なる程其通り申したに違ない此方夫婦としりて家をするべき男子なししかるに其元の甥御武介事りちぎしやうじきなるを見こみに養子に致したく望みなりといふおぢ聞て御意は忝存ずれ共びんぼうな我くとも事なればたのみのしるしさへ用意出来申さず武介事もきかへとうな候へば何かつりあひがたくこそといふ女房いやくそれはくするしからず人柄を見こみに髻にせんと望む事なればしんもつと

うの儀式は入らず無用たるべし又きがへ不自由ならば此方にてこしらへさせんはいと安し望か、つて申し出すからはぜひにもらひ申たし聞入れて下されと有にぞおぢ甥目と目を見合せあきれながら悦ふ事かぎりなし

かくて相談きはまり吉日をあらんて(六オ)武介をよびとり娘にめあはせ親子夫婦むつましく菜売もやめてれきくの人躰に成り人く、羨れる所に三年して姉娘むなしくなる

後林蔵女房にさ、やきけるは髻の人がら心いきなら打そろふて宜敷生れつきなるに今ふりよのあいしやうに朝夕かなしみくらす情見るにしのびず今次の妹娘又せいちやうせり髻をえらふ共武介とうぜんのりちぎなる者も有まじその上武介も外より女房をむかへば我等が行末とてもたのもしげなししよせん次の娘を姉の代に武介にめあはすべしと内談しめて終に次の娘を武介が女房になしたる

しかるに又二年過て此娘も同じく病死す林蔵夫婦武介は申に及ばず家内のなげきいはんかたなくとへんやうも泣くのべにをくり七日くのついぜんも過て程なふ百日もたちて林蔵女房にむかひ前後六年の間に二人の娘をうしなふかなしみの情たへがたししかれ共かくてもあらねぬ事なり今こなる娘年廿に過ぬればふにあいにも有まじいかにと談すれば女房は

(六ウ)  
(挿画オ) 牛馬は人の助けになる物なればみだりに食すべか

らす病をいやす薬には用ゆるともゆるす処あるべし  
／子どもござかしふてこのうゑはうしはうれまいか  
／を、きなうしがきたは)

(挿画ウ) (むかしは大名なく公家武家とも国司に成て受領す  
れは四年つ、其国にいたりて治る事也) (このやちう  
にいづくよりまいらずぞ) (ちと御ねがいまいり  
した)

なみだながら我くがかうのほどかくばかりなれば此上ながら  
乙娘をば武介が後縁となさばすへ六十日のあんどを見るといふ  
ものなりと示しあはせて取はからひ武介が妻となしぬ此娘も三  
年有て病死せしかば林蔵夫婦武介共あつまり泣くらしける

折節老人の老僧門をとないてときれうをこふ女房うれへの中な  
れば心す、まず声するどにふかうにあいて取込み其段では御座  
らぬといはんとするを林蔵なだめて三人の娘のこらず死失せと  
しよりてかなしいめにあふ事皆前生のあくがうなればせめては  
此僧をとめてこんきやうゑかうしてもらふべし其方は此僧を  
ぶつまへともなふべし我はけふいまだはかへ参らねば是より香  
花をそなへに行ついでにあいら町の八百やへ寄てときのりやう  
りをあつらへ行べしと出ゆさける跡にて女房かの僧をざしきへ  
しやうじけるが氣のつかれにやいねふりける

萩坊奥路作『西行諸国断』翻刻と解題(速水)

り又智武介が前世は金持の商人にて多の金銀を身につけて其方  
が夫の舟をかりて江戸へ行けるに其(七才)方が夫かの商人の  
財宝をたばかりかすめ取れり三人の娘は其時水主にやとはれた  
る者共なり商人の財宝をうばひし事をせけんにもれん事を思ふ  
て水主三人に三拾兩づ、の金子をわかちやりて口をとめける三  
人の者共三十兩の金子をとくぶんとしたるむくひにて汝が子と  
生れきたりて金子三十兩のあたいを久しく三年が間各武介を  
夫として仕へたりされば其方達の資財はことごとく智の物なり  
然れば前生のいんゑんなれば今更うらみとがめるすじにてはな  
しといふ

女房おどろき夢さめてあたりをみれば僧も見へず林蔵は帰りて  
此事をき、只ぼうぜんと有けるがや、しばししてがういんの程  
をかんしんしてかとかのこらず婚の武介にゆづりおき女房もろ  
共旦那寺へゆきじゆかいのげをさづかり出家をとげて後夫婦一  
所に諸国しゆぎやうに出けるが其行所をしらずかし

即身即牛

(七ウ)

生をかへてむくふをしゆくがうといふ只今申た松屋がときは是  
なり又げんざいにてきせんとその報ひをあらはずをめうばつと  
申す事なり

肥前の長崎より一とせ橋照軒といふ者堺の津に來りさかんにこ

へたる牛をひざきうりて金銀をもふけ富をなせりその法もとは日本の牛なるを朝せん牛なりとひろうせりこへたる牛を打すくめて気絶んとすればしほみづを牛の心へそ、ぎいれて木の槌にて又牛の五臓をうちすくめる毎日かくのごとくするを渡世とすすねんの後橋照軒やみつきて身内いたみ苦しむ家僕にいひつけ木槌にて己が身をた、かせすこしやすんで又しほみづをこふてのむかくすれば痛くつろぎ気迄もこ、ろよしといふ

二日の後よりみづからしほみづをのむ事叶はず家内の者に言ひ付口中にそ、ぎいれさせける

三日めの夜すでに死なんとする時五人の子供をよんで我自らしほみづをのむ事あたはず汝らおのゝ三貫づ、我名代にのみくれよといふ五人の子供父がさしづにせひなくひざまづいてのみ（八オ）おはる皆牛の所作なり橋照軒その時申しけるは我牛をころし和牛を唐牛とあざむきたるあくがう重ければ死して牛となるべし汝ら仏事をなして幸ひに我をさいどしてゑさせよといひおはりて忽ち牛のほゆるがごとく叫びたへいりてむなしくなれり

### 死者尋問

世間に来世はないなど、かたみきに申す人神道じゆ道を学ぶといへどもまだち、くさきあかぼんぶらがあとさきの弁へなしに

言ひつゝのいとお、ししかはあれどもげんざい鎌倉の花が谷に死者のきたりてほうゆうをとむらひし事もたれ人も見きたり聞つたへ侍る

鎌倉の武家町へ立入りの丁人き、やう屋嘉左衛門が事也この嘉左衛門はむまれつきすぐれてにうわにして第一きさくなる者なれば家敷方の家老用人をはじめ末の小役人までかわゆがりてもてはやしけるにふと病つきてむなしく成れり

其後十日ばかりも過て早朝に嘉左衛門ともだち柳や源兵へかたのみせをた、きけるをでつちいらへておきいで、みせの戸をひらき（八ウ）たそやと見れば嘉左衛門なりければおそれて戸をしめはしりいりて主人へかくとつげる源兵へもいぶかしく立出見れば嘉左衛門常にかはらずいかにやいかにといふおんせい笑ひがほ衣服にいたるまで死せる者とは見へす

源兵へ嘉左衛門が手を取なぐさめて申すやう此比人のうはさを聞ば近比御辺は死去有しと扱はきよせつにて有けるよのふまづ（八）是へと一問にしやうじあさはんをふるまひ源兵へ申けるは世に此よあのよのへだて有りてたれかあのよを見てきたといふ者もないがどの様な事でも有ふなといへは嘉左衛門打笑ひ此よあのよとてかくべつちがふた事はない大がいがいごしやうのよい人は逍遥自由を得あく人は定てくつうのむくひをうけるばかりの事ならん源兵へ又せけんの金銀財宝を取あつかい申事も此方に



かはらぬにや嘉左衛門成程金銀はめいどでも重宝いたすよしう  
け給はり及ぶといふ

源兵へあの僧をしやうじて経をよむ多きになる事かと嘉左衛門  
こたへてもししんじつに行ふ僧ならばはなはだよしさもあらぬ  
世間坊守をまねいてごんぎやう（九才）さすは多きなくしてほど  
こす人のついへになるのみ用にはたつまじといふ源兵へはじめ  
て死者ならんとすいりやうしてしきりに心こはげ立がんしよく  
あをざめていたり嘉左衛門はついたつと見へしがゆきがたしら  
ず源兵へ扱は日比のしんせつを忘れずがたをあらはしけるよ  
とあはれに思ひぶつだんへ灯をあげて茶湯しける

同郷所縁

死者のとひくるといふ事もふしぎに似てふしぎにあらざる其しん  
せつにひかれ又は後事をいひのこさんとてまよひ来りあるひは  
じんあいの人と見て其おんしをねがふのるいなど様々のしざ  
いある事にぞ待る伝へ承りし事有

王代のむかし国司を諸国へ拜任せらる事あり文徳の御代橋の  
広主といふ人石見の国司たるときよふけ人しづまりてかい下に  
しこうする者有広主あやしみ見ればすはうに多ほしきたる年比  
六十余りなる男がんしよくせうくとしてひざまづいて申はそ  
れがしは古曾部の何がしと申す公のどうきやうにて当国に來り

萩坊奥路作『西行諸国断』翻刻と解題（速水）

すみて候処今朝身まかりぬ子（九才）孫きうほうにて古郷へ帰  
る事あたはずねがはくは公同郷のよしみをあはれみ思し召そ  
れがしを古郷へおくりかへし下さらばがいこつ久しく沙道にし  
づむことを致さるべし是公のめぐみなり明朝三人の若者しこ  
う仕るべし是それがしが子孫なり未だまいらざる様に願ひ奉ると申  
すいさん者なりとておつはらひ下されざる様に願ひ奉ると申  
て立上る共なくきゆる共なくうせぬ

国司もふしぎながら其ぶんにして有ける翌早天にはたして三人  
の者共参りければ国司たいめん有て事のよしを尋らるゝに夜前  
の者の申すに分毛もたがいなく三人詞をそろへて申は夜前夢に  
亡父来り告て申は公へ願ひ奉り置ぬ明日早く御館へさんこう  
仕れと申し付ると時もちがへず三人共同し夢見あまりにふしぎ  
にぞんじすいさん仕ると申上る国司も扱はとかんたん有て金子  
百両三人の子供にたまひてければありがたくちやうだいでして父  
がしかばねをになふて古郷へ帰りあつくほむむり其余りにては  
田地をかひもとめ一生祭祀のためにそなへけるとなにかたり  
伝ふ

西行三之巻終

（十才）

西行諸国噺

四之目録

無頭幽霊

子の討死をなげくらう母のさた人の口をかりそめ  
ならぬうらみのむくひはきもさきへあつとばかり

幽明道連

国守の御送葬おがみもどりのさた何者ともしろぬめ  
の中つ、みつたひおもひもよらぬ二どのびつくり一  
度に四人の命

疑念蛇形

田地をうつて友をすくひしさたひんすりやどんする  
とのたとへもまのあたりなる兄弟ぶんのしんじつ

四社神徳

金をぬすみし手代のさたてんばつの網にふしぎの足  
とめ礼明にまつすくなはくじやう

隠婆懺悔

非道なきんぐをもふけしむくひのさたうぶめの礼  
もつに位はいとは積悪のくぎかすがい

地中古戸

怪異をつ、しまぬ血気のさたふしんのものすきはと  
きくかわるうつり気な傍若ふじん

夜半囲碁

高野山行幸のさた泊人はかべに耳もの云ふは石の  
事くらがりて昼のしやうぶをよめにしうとめ

鼈屋手盛

時ならざるをくた是さた弁てんの御利しやうでたす  
かつたは いのち みやう が

無頭幽霊

夫冥魂のうかれまよひて此世に顕はれきたることもろこしには  
はくゆうが霊民にわざはひせしことをのせ我朝にても小野篁めい  
どへ往来有りしをつたへ鹿嶋三郎がばうこんのことなど旧記に  
のする所を見給ふべし

一字空白 八幡殿奥州せいばつの折から衣川のかつせん安倍貞  
任が党に久留美藤五藤六兄弟の者の母鳥海の柵中に有りしが兄  
弟うち死のよしを聞より老母しうたんの余りやまいのゆかに打  
ふしけるが甥の重光次郎と言者をいくさばにつかはして死がい  
を尋ねさせけるに首はかたきにとられてごくもんにかゝりむく  
ろばかりを取帰れば母はいと苦しくて命もたへぐならんと  
しけるがさるにても次郎を枕ちかくへよびて其方何卒兄弟が首  
を盗みてむくろにつぎてほふむり得させよかすと金式十兩には  
りこしをやりて死がいをこれにのせて寺へおくりほふむりくれ

よと有る

次郎心得とうけあひ二いろをうけとり夫よりしのびうかゞひて兄弟が首をなんなく盗み(二オ)とつて帰りしが道にてあくねんおこり首をばたにそこへほかしからだはあたりのふか田へほりすてはりこしはうりしろなし扱久留美が母のかたへゆきて申は首をばなんなく盗とつて胴へつぎてあみた寺のきやうないに納きたりとあざむきだまし大なる徳つきぬと心うれしく思ひるけるに五六日も過て次郎ほかより酒にゑいて帰るに何かは知らず次郎があとにつきてきたる

あんやの事なればたれといふ事をしらずたそと問へ共こたへずやどに来つきければかの者も同じく次郎方へいるを見れば胴ばかりにてくびなき男二人なりこはそもといふ内次郎がしもべ三助が口をかりて我くは久留美兄弟がゆうれいなり次郎はやく我くびをかへしえさせよとのゝしる

次郎はおそれをなしてふるひいたり時にかのくびなきゆうれい又下部が口をかりて其方われらをのせをくるべきこしをうり金子をかすめ取我等がくびは谷底へほかし胴は田の中へはめたるこそやすかね閻王の御前へつれゆきて今に思ひしらせんきたれくと呼ふこへ次郎がきも先へこたへてあつとばかりにて息たへしとぞ

(二ウ)

幽明道連

鬼は帰なりとちうして地水火風の四大けがうのたましいを本来の空にかへすといふぎにして何様死の道ほどむりやうに頼なきものあらじさればにや王公大人ものがれ給はず

長門の国の守せいきよ有て御家門の御歎は申すに及ばずからう用人いげしたく町の町人百姓迄おし奉るといへどもかへらずすでに御復はひかりもがりの日数も立て御ゆひがいは御ぼだいしよへ納り御からだみの御そうく火家龜前兜等の用意こたくくと、のひければ定日有てごぎしき行はれる当日をおがみ奉らんと御城下在のきせんくんじゆしける中に大津郡三隅村庄や吉左衛門が女房母娘四人つきくしたがふておがみに出ける

帰るさ惣しらがの婆はおがみ戻りと見へて杖にすがりよろほひながらあとよりおひつき来る吉左衛門が母声をかけていづかたまで帰らるゝにやといへば三隅村の者也とこたふ扱は同村にてあなれど大在所なれば見知らぬも断也とて道すがら咄しをしつれもて行てつゝみにかゝりけるに此婆の跡になりぬ折から吉左衛門が下人舟をさして迎ひに来ればつゝみをまはれば一里も有べきに舟にてさし(三オ)渡せば五六丁もちかし日の入らぬ間に大かたかへりつきなんと皆く舟にのりうつり最前の婆様も一所に渡してしんじよとはるくむかふよりたどりくるを待

て舟にのり給へといへば婆はははことの外ほかに悦よろこびける程ほどなくむかふへ渡してきしにあがればばはは忝かたじけなくしとあつく礼をいふて別わかれ行

ふねにのこりける四人の娘がすがさの中に取おとしたるとみへて白しろ鉢はちのふくさにつゝ、みし物有ありばはをたつねて渡さんと見めぐりけれ共行がた知れねばぜひなく持もちかへり取にやくると待まちけれども来きらざりければ四五日も過てふくさづ、みをほどき見れば死人しにんの額ひたいにおくごましほづ、みなる宝冠ほうかんといふもの四ついれて有ければ忌いまはしく氣きにかゝりて川水かわみづにながしすて家内けい内を清きよめるが一月の内に四人の娘一度ひとに病付やまつきて死失しにうせけるふしぎいわんかたなし

疑念ぎねん蛇形じやけい

西国さいごくあんぎやの折ひげんから備前びぜんの国くにの里人さとびとのかたりしは当国とうこく児島こじまといふ所に宇兵うへいへ嘉兵かへいへといふ者有竹馬たけうまの昔むかしよりしたしみむつまじく兄弟けいだいぶんに成てたがひに内外うちそとのへだてなくしんせつをつくしてつきあひける所ところにふとしたるしそんじ間違まちがひ出来て宇兵うへいへらうしやにおよびければ嘉兵かへいへは（三ツ）なはだ力ちからをおとしなげきでかげうをやめてさまくと心をつくしてすじを頼たのみ宇兵うへいへがゆるされん事をねかふ諸方しよほうへ付届つけまけまいないなんどしてとがなきしだいをうつたへけるによつて終に宇兵うへいへゆるされてらうを

出る事をえたり

此時分このときの入用にゅうよう万面のついへゆきたらはぬ事有て嘉兵かへいへ了簡りょうかんして宇兵うへいへ所持しじの田地でんちやしきをうりてかれがらうしやをすくひいだせり宇兵うへいへはしゆつらうしけれどわがでんぢやしきにはなれければとせいの綱ななきれたる心地こころにてかへつて嘉兵かへいへをうらみいさどほり我われ只今ただいま死しざいをたすかりたれどさんぎやうなければ又また餓死がしに及およんとす

嘉兵かへいへの致いたしたたこそ日比ひびにもにずいかにしても心得こころえがたしもしやしぜん我われでんたくの代銀だいにんを此度このたびの入用にゅうようの外ほかによけい過銀くわぎんありて嘉兵かへいへ己おのれが得用とくようとなしけんもしるべからず大かたは嘉兵かへいへがよくしんにこそとうたがひいかりて我死われしなばどくじやと成てかれをかみころさんといかりけるがいくほどもなくいきどほりつもりてやみふし食くす、みもなくむねはらをかけてはりみちておせばうごきうねりだち。またわになりてさながらへびのなりに似にたりけるが病やまおもりて死期しごちかきと見ゆ

この始はじめ終しゆうをよくしりたる者有て嘉兵かへいへに申まをは其方そのほう宇兵うへいへと年来ねんらい心こころやすく兄あに （四オ）弟あにといはるゝ中なかにて宇兵うへいへ今かくのごときうたがひ恨うらみつもりて十死じゅうし一生いっせいとわづらひその様ようすでにへびなりになれり然しかれば其方そのほうの行末ゆけいの為ためあしからんかと心付こころづを聞きて嘉兵かへいへ大におどろき我われかつてかゝる事を知らず田宅でんたくをうりたるはかれがなんぎをすくはんためにして更さらにやしんなき事ことなるに疑念ぎねんふ

かき宇兵へ哉とかつ悔みもつともおそれて早速宇兵へ方へ人をやり病氣うつさんの為来り給へと申遣すに宇兵へはじめの程は参るまじきよしなみけれ共使再三におよんで嘉兵へじきに宇兵衛方へゆき様くんに申しぜん嘉兵へに心付したる人もゆきてなくさめす、め駕にのせ嘉兵へ方へつれ来る嘉兵へは重ねふとんしきて宇兵へがざせきをもふけ札をあつふして酒少くす、め扱かの田地をうりたる抛なきしさいをかたり入用の品々銀高に引合して帳面を出してあたへ今我方に田宅をうりたる銀子だけを調へ置たれば是を参らす間本のごとくかひもどし給へと銀子を宇兵へにわたししんせつをつくしそこいなかりければ宇兵へ忽ち心とけて快く酒打のみけるが卒然として大に吐しけるに赤きへび口よりおどり出て

(四ツ)

(挿絵オ) 欠落する者は其始にかけをかくさん事安かるべしと思ふはおろかなりあめが下の内いづくにか身を入る処あるべし深く其はじめに恐れ慎むべし／これくひんせんがもらいたい／どふやらうさんな人

(挿絵ウ) 古時代の法にても婦人懐胎して生れつきよわく産得る事かたきには子をおろして母を助ることなり／をそろしいしやうばいの／つきよとみとはくふもの

かしらぬ／いろごとにはよいうしろだてしや

嘉兵へが前へはしりゆくを座中の人くよつてか、つて打ころしぬ

夫より宇兵へがやまいうしなふがごとくへいゆしてよろこびかざりなく以前のごとく兩人断弦のちぎりをなせり

#### 四社神徳

神明の赫々靈々としてひぎをいれ給はざる事今更申もおそれある事ながら仰ぎてもなをたつとむべき事共なりき住吉四社の御神は摂泉の大びやうにして其いせい神徳あげてかぞへがたし此比泉州堺の町になみまつ屋といふ者同所の郡司なる老人金子甘両を取かへ置しに期にのぞんで元利そろへきたりあつく謝してかへされける折ふしなみまつや方には客有てしゆゑんさいちうなりければ此金をでつち惣吉に渡しちまできつとばんして守りいよと申付置けるを手代宇平次惣吉をころして金子をうばひかけおちせしがよくじつ宇平次舟ばに有を見付てとらへきたり

やがてろけんし及びその日宇平次奉行所へひかれがうもんにいたりて分明のはくぜうに及ぶときに奉行申さる、は人をころし金を盗んでなんぞ遠くちくてん(五才)せずしてとらへらる、事ゆだんなりとあるに宇平次申は其段心付ざるにあらすすでに

夜前東国にくたらんと存し盗しかねをはだにつけ大坂をさして  
住吉迄參る所あはてとりいそぎ申たるゆへか四社のしんびやう  
へゆきあたり取てかへせば向ふも又四社のみや有こはそもいか  
にぞやとどちらへよけてもゆくさき／＼四めんみな四社のしん  
びやう前に立ふさがり物くるはしくかけまはりうろたへはしれ  
共ぬけくゞりゆく事あたはずその内に夜明ぬればぜひなく立帰  
りびんせんを尋ねて西国へ下らんとぞんずる内ごぎんみおつて  
きびしくめしとられ候ぬとぞ申ける

金はなみまつやへかへし下され宇平次はざんざいの梟首にぞ  
行れける

かのなみまつやはとし比住吉信かうの人にこそ

隠婆懺悔

仏經に懺悔に罪をめつするとはあやまつて改事にはゞからざ  
るのぎにして世尊のきやうゆ仰さるべし

河内国鳥飼の郷にとりあげばゞ有此ばゞ専らだゝいのめいしん  
にて多の銀を取てうけあふて子をおろすゆへ子とりばゞといふ  
是によ(五ッ)つて家ます／＼とめり

ある時ばゞが夢に若き女四人来りめん／＼いはいをばゞがまへ  
に直し先にはたいたいの子をおろし給はりたるにより我／＼も  
ともに三づのくかいにしづみちにけがれて永劫のうれへをうけ

はべる是はだゝいのやくれいに參らするとさし出したる顔まつ  
しろにかねくろ／＼とつけたるをむき出したるまなこのれ  
い／＼とすさまじきにきんてつのやう成りし子とりばゞもみ  
じ／＼くにやりとしてそつとはげ立うちおどろきけるが夫よ  
りかんねつのやまひをうけるしげにさけびける

煩ひつきて三日めの夕ぐれに見まひにゆきしとなりのか、共を  
枕ちかくよせてくどき泣けるこそむざんなれ淫をすゝめ人をこ  
ろす二つのしわざのおもきを今こそ思ひしられぬ大身貴家につ  
かゆるこしもと主人の手がかゝり内方のりんきかうせんかたな  
くてひそかにだゝいをたのみ来るもあれば人の小娘若後家尼  
妙三あるひは姑の十八のむかしをおもひだしてのふらち皆／＼  
身を持そこなふてくはいたいになりたるをうけあひ又はなんざ  
んに子をころしてうみおとさすなど多(六ッ)の人のいのちをと  
りしあくがうつもりて身にむくひきたる我をたのみて養生有  
しかたは其家だんぜつに及ぶかすざわいふてまはしになりてひ  
んくをうくるかよきむくひはなきなりたゞぜんをのこむ家には  
我らを用ひぬからふうきにして子孫はんじやうせり我今悔めど  
もおそくほぞをかめ共かへらずいづれも必ず／＼我らが党のひ  
ぎなる方へちかより給ふ事なかれとくるしきいきの下より言ひ  
おはり七転八倒あがき死にたをれるむくいこのほどおそるべし  
とも中／＼

地中古戸

爰こゝに一つ若殿原わかとのぼらにこゝろへあるべきことを聞せ申さんすべてふるき明地あきち又は家敷あきのうらなどにあるふる木のかぶ五輪りんの石などをほりすて申事みだりにせざる事也よんどころなくじやまになる時は僧をしやうじてよう気をはらひきよめ又はじ、んものいみしてしんぎにうつたへてとりのくべしさもなくてもかいいにならずば其まゝにしてやむべき事なり

いんか年ねん中ちゆうに大炊殿おほいどののかしんに柿本重かきもぢゆう

(六六)

(挿絵ウ) 古き塚かぶつなどみだりに掘ほすてる事有べからず皆人みなひとの先祖せんぞにして大切たいぢゆうなるものなればたとへ外ほかなる人なり

とも仁心じんしんあらは或は改あらためほうむるべき事なり／めつたにほり出すな／ふたをとりませふか／これはふしぎな事の)

(挿絵ウ) 泥亀すつほんにかぎらす食物じよくちゆうになるものは異いやうなる物何なににても食すまじことさらいきもの、足の多おほきまたは

すくなきいづれにかたはなる物など食らふべからず／なむあみだぶつ／ば、さまあれをみさつしやれ／すつほんじるまいらんか)

左衛門といふ者城じやう外南門げなんもんのほか小園せうえんをかまへ楼ろうをたて、延えん寿亭じゆうていとなづけじゆもくうゑして泉水せんすゐ飛石とひのか、りきれい言いはんかたなし

萩坊輿路作『西行諸国断』翻刻と解題(速水)

重左衛門其性そぼうにして心おそき男にて時々普請ふしんのものずきかはりていく度たびあらためなをしけん又あるとき地ちをほりて池となさんと思ひつきお、くの人夫にんぶをかけて壺か又ばかりもほらせ見るに一つの石のからふす有り其下に大なるかめをならべあはせたるをひらき見れば内に一つの戸かどけんぜんとしていけるがごときかみ長ながくのびさばきて五躰たいにうつかぶり手足あしのつめは惣身みをめぐりかゝまるを見る人みのけよだちおそれわな、きけれ共とももとよりだいたんふてきの柿本かきもすこしもどうてんせず君子くんしの徳はようくはいかつ事あたはずなんじやうこれしきの穢物あぢものおそる、にたらず打うくだいてすてよといひけるを人々いさめとどめければ其まゝ、かめを川水がみづのふかきそこへしづめすてさせけるが夫それよりいくほどもなく重左衛門重病ちゆうぢゆうにおかされせいしんくはうこつとして百薬ひやくやくしるしあらず日々にやせおとろへて終つひにむなしくなれりとぞ

(七オ)

夜半囲碁

唐たうの帝堯ていぎやう丹朱たんしゆのために碁局ぎきよくをつくりおしへ給たまふを濫觴らんさうとして和漢わかんにひろまりゆうげいのかうつれ／／をなぐさむるきぶつとはなれり  
一院いんの御みとき葛見くみ新介しんすけといふ者生得しやうとくをこのみてうちけるが後々のち／／はいかなるご打うちにもかたすといふ事なした、みごばんと

なづけてくはいちうするやうにこしらへごばんをもちてつねに  
ゆくさき／＼へ持まはりてすこしもいとまあれば取出してひと  
りひらき見てくふうをなしけるひと、せ高野山ぎやうかうの事  
ありしに新介もぐぶのやくにさ、れけるが撰清の大臣がたをは  
じめぶんのれき／＼我も／＼としたがひ奉る道中泊り／＼の  
はたごやふさがりつまりて末／＼のやく人は道筋のしやうばい  
家にあやどをとりそれも猶たらずして社頭のはいでんぶつかくつ  
ちどうに夜を明すもありけり

ある夕ぐれ新介人じゆにおくれて泊るべき家なければ谷がけの  
小ぶかき道を遠く尋ねまどひからふして山中にはなれ家あるを  
目あてに一しゆくをこふ老女立出てま(七)ばらに見くるしき  
はにふのすまるくるしからずば御入りあれといふ新介悦び内に  
入て見れば男あるじはるすと見へてよめらしき女とさきの老女  
とたゞ二人ばかり有てひをもとささずやう／＼いろりにしばさ  
しくべ夫を明りとなしちやを煮てもてなし余はたばこの火より  
外はなし程なく初夜も過ておの／＼ふしどをさだめ新介をほう  
ぐばりなる一間にねさせ老女はなんどよめはいろりの前にふし  
けるねどうぐといふ者もなくきのま、うちころびふしぬ  
さなきだに山中は風はげしくそう／＼しきにまとのすき戸のひ  
まよりふきこむあらしさむくすざましくて新介ぬふる事あたは  
ずありけるにしばし有てなんどよりしうとめよめに申はひるう

ちたるこの残りお、さよこよひ又かけものせんいかにとよめこ  
たへてよろしふ侍りなんいざやといふ声にもとよりひもなきく  
らがりて間をへだてふせりながらふしぎの事をいふものかなと  
新介いぶかりながら日ごろすきの道なればいかゞすらんとふす  
まにそひみ、をつけて聞あるまづよめの申は東の五南の九に石  
をおきますしうとめ聞て我は東の五南の十二におくよめ又西  
の(八)八南の七におくしうとめ又西の九南の十におかんとい  
ふは一手／＼ことに思推や、しばし有てうしみつばかりに至り  
て新介こと／＼く聞取きおくするにおよそ三十六手程うちてた  
ちまちしうとめのいふよめ女早まけたり我たゞ九もくのかち也  
とよめもなる程その通りなりと一どにどつと笑ふ新介夜の明る  
をまちて老女にむかひ夜前のしだい一間にて聞し扱／＼おどろ  
き入たるかなふの事共也我等もすこしたちあればうち見申  
たしおしへ給はらんやといへば老女聞ていと安きことなれ共見  
へが、りのひんかごばんもなければ石もなしと新介そのばん爰  
に所持せはと例のた、みごばんを出せば老女打笑ふてげにもし  
うしんなる人かなしばらくまづよめと勝負あれとやがてよめと  
さしむかふてうたしむるに新介たしなみのひじゆつをつくしあ  
せみづに成てこんきをくだきけれども数手ならずしてあへなく  
三番迄まけるよめが基せいのみやうしゆを新介ほとんどかん  
じねがはくば御しなん下さるべしといへば老女よめにいふ此子



おしゆべしよめいらへて攻守殺奪救急防拒のほうをしめす

新介それ／＼にまなびえてまだ此上にひじゆつお、(八ウ) ぎもあらばつたへ給はれとねがへば老女人間のございはいは是にてたりぬといふ内辰のこくにおよべば御ともさきのはづれん事をうれへて又折こそあらんと是非なく新介はごばんをたゝみくはいちうしいとまこふて立出半丁ばかり行しがおもへばなごりおしくあとふりかへりて見るによめもしうとめもかどに立て見おくりいと見る内に一双のまつ枯木となりぜん／＼として今迄有し家もきへうせければこはいかにと立帰りに見れ共ならぶ木のまをふきわくる風のみしん／＼としてあとかたもなければすべき様なく新介はほんぢんさしていそぎける

夫より葛見がご名以前に十倍して天下に菅人のごうちとよばれけるかのしうとめよめのあらそひ打たるごだてを新介じゆくれんして今の上までも木曾くりからおとしの法といふとかや

隨屋手盛

折節典葉頭和氣友忠御膳まはりの禁好物のぎにつき仙満君の御前に有り其用もすみてたいしゆつ致されける仰にて西行申さる、はいかさま只今友忠申し上らる、(九ウ) ごとくととへ平食のものにてもじせつによりて禁忌の事は有はづの事也さればすいらうくだりてぎよべつをけんぜすといふは礼記のおきてとす

る処むさとたべまじき事也

鎌倉町庚申堂の坂の下にまいばんみせを出すにうりや有あるとますつほんをにてさらにもり出し置しにこふかさきあさがほなるのさら也けるゆへあきさら也と見て通るばかりゆき、はすれど立よりもとむる人なし毎日毎ばんたき直す事三日四日めにかのにうりやがむこ来るに此すつほんを出してあたへけれ共むこは此節弁天の法をおこなひけつさいなりとてくはずよつてあるじ菅人してくひつくしぬさてよくちやう日たける迄にうりやがみせあかざればきんじよより戸をたゝきよびおこせ共いらへなくものをとせざれば夫なりにして置ければやがて昼にちかくなればふしんに思ひとなりより戸をうちのはつして内に入り見ればにうりやの親父ねどころにちをはいて死しいたり皆／＼おどろきさはぎいそぎむこをよびよせければむこやせんのだいをかたり件のすつほんは日かず過てくさりたるならん夫をくふてどくにあてられたる成るべしすでに我等も是(九ウ) をくひたらばかならず死すべかりしにしやうじんだけにたべさりしゆへさいわいに命をまつたふせしはひとへに弁天の御かげによるもの也とぞ申しける此事をいつぞや和氣氏に物がたりしに友忠聞やいなや手をうつてかたん有し其ゆへは王充が論に雨水暴に下れば虫蛇変化して魚鼈となるそのほんしんをはなれてしばらくむしにへんす臣つ、しんであへてけんぜすじやべつにへんじてど

く有と見へたり然れば此にうりやがすつほんもへびのなりたるにこそと申されけるしかしながらひきがへるがうづらに成りす、めがはまぐりにへんずるなどのときはどく物とはならず皆夫く(みなそれ)のしやうによる事成るべし北面の武士が西行に成りしも同じといへは人く御前をわすれて一度にとよみわらはれき西行四之巻終

(十オ)

(本文に続き『名玉天地説』『博物筌』の広告あり)

## 西行諸国噺

### 五之目録

鱒崎悪魚

向ふ見ずの若者が伝ふしぎの命をたすかつた洞の内

姫路洪水

のめつたやたらづき

地蔵堂妖

信心なる祖父祖母が伝かた折紙ではりたてるは家は

辻堂礼讓

じまつてないづな善根の功德

狸を生捕りしやう者の伝人形のげいつくしあほふら

しいあんぼうづが殊勝顔

(一オ)

害をのがれた足輕が伝管鑓をもつて拝殿をうかへ

害をのがれた足輕が伝管鑓をもつて拝殿をうかへ

ば豺狼のあし跡が珍客へのちそうぶり  
嬰兒難病

頼れて人をころした下人が伝此はづとは知りながら

さかねだりするしりやうのかどちがへ

富士山詠

高大そろへの狂哥師の伝なんだいを云かけた鬼神も

一しゆにやはらく国のはんじやう

(二ウ)

鱒崎悪魚

愚僧とんせいの後はいづくをあてともなくかけまはりむじやう

じんそくの断をくはんぜし事もあれば神異ようくはひにもであ

い名山古跡をもたづねこしをれたたねともながめし時も有てむ

りやうのたびをなせしに一とせ能登の国にまかりし事有しに人

のかたりけるは津倉といふ浦辺の沖たつみにあたりてふかゞさ

きといふ所は地かたよりは廿丁あまりもへだ、れるが此うみそ

こには主といふ物あなると以前より申しならはしゆき、のふね

も其所をよけてのらずりやうせんあみぶねなども一向よりつか

ずとなん

いつの比にや此うらに伝次郎とてがうりき者有所にて腕をさす

かともだち中間のわかいもの共六七人申しあはせかの所へふね

をのりかけ見ばやとりやうせんにとりのりふなそこにかたなり

きざしではほうちやうとびぐち様の物をかくし極月の半も過る  
かんふうに五郎八茶わんになんくと酒引か(二オ)けてめ  
んくにはろゑひきげんの夕間暮ふねをのり出す十丁ばかりさ  
しもになごやかなるうみづらの俄にかぜはげしくなみさはぎあ  
らくすさまじきけしきにふねはたゞよひあやふきにもくつせ  
ずろひやうしそろへてあせみづになりさばかりの大波おしき  
りくゆくほどにふねはくつがへりしむがごとくにしては又  
うきあがりくてあやふき事いふばかりなし

扱むかふを見れば山のごとくなるものあらはれ見へたりよくす  
かしみればかのふかのせにて大なる口をあきてうしほをのみ吹  
かへす有さまあらはにしていづれもきもたましむをうしなふば  
かりなればそのあい四五丁になりちかづきけるときいやくよ  
しなき事にあたら命をうしなはんよりはこぎもどせといふほど  
もあらせずまたく内にほらあなの内へがつふりといふて入る  
よと思へばさしもごくかんのぢぶんなるに其ねつする事六月の  
ゑんでんにてりつけらるゝごとくきりさめのごとくふりかかる  
もの有て血なまぐさくゑゝるこ、ちにおぼへ気もくらむほどな  
れば皆ふなそこにうづくまりねんぶつだいまくしんごんだらに  
かつてしだいかたことまじ(二ウ)りに申ていまやいのちを取ら  
るゝとくわんねんしてありける

伝次郎きつと心つき人くくにげじしてふなそこよりわざざしほ

萩坊奥路作『西行諸国断』翻刻と解題(速水)

うてうとびぐち山かたなゑものくをなげ出しさつする所さい  
ぜんほらへ入りしとおぼへしは是ほらにあらざるをのほらの内  
なるぞや左あればおのくも我等もおつ、けからだのきへうせ  
んはひつじやうなればゆだんならずのがれんたけはのがるべし  
いざ此はものにていづれもこんなかぎりめくらづきにつきやぶり  
てのがれて見よとてんでにあてどはなけれどやたらにそこらを  
きつてまはり又はつきたてうちこみければ大にうなり出てしん  
でんらいどうおびたしたしけるよとおもふ内に皆くそのまゝに  
気を取りうしなひし事や、久しくおぼへて又おのく正氣つき  
てあたりを見れば津倉のいそばたにふねはそんじながらながれ  
つきうみの面はことくく血にそまりてかのふかはあみにかけ  
てくがへ引あげあり

是は一浦の人くすくひあげたるなりければうれしさとへん  
方なく立あがらんとすれ共足なへすたれてかなはざれば人のか  
たにかゝりてようく我(二三オ)家に帰りけれ共ねつ氣つよくし  
て打ふしみうちに丹彦出てなやみけるが二ヶ月程も過てまつた  
くへいゆしてつねのごとくなりけると也

姫路洪水

ぶつほうのきずいはふかしぎにしてしんくけんごなればまつ  
せといへども其れいおうある事は皆しやうじきしんよりなれる

もの也

一とせ播州姫路といへる所の近在に祖父祖母あり娘に婿をとりてせたいを渡し其身は小家を立ていんきよしけるが兩人ながら元来のぜん人にて高野大師のながれをくみ祖師のおしへを一トすじにまもりくはうやうしんごんおこたりなくて有けりこ、に老人の僧姫路きんへんをけえんすればむゑんなるがゆへにか又はじやけんのふうぞくにやしんじんするかたもなければほどこしを行ひくようきゑする人もなかりしにこの老人夫婦の者のみ齋をほどこしてかつめうの思ひをよせ後くはこの僧のくるたびごとくに齋をす、めひじをそなへ月をかさねていさ、かついにあきいとふことなし

ある時かの僧

(三ツ)

(挿絵オ) 海は廣大もなきものなれば其中にすむ魚何ほど大  
きなる物あらん人のはかりしることはならざるなり  
／みなうろたへまいく／なむさんを、きな口じ  
や)

(挿絵ウ) 世に化物といふは多くつね狸のなす事多しまた  
はわが心から求めて見る類いなり／さてもあやふい  
事の／いざやうさまくいでた、かふ／まつかせが  
つてんじや／やつことさ、ゆる)

来りてぢゞばゞにかたられける様は此所大なんにあふ事有べし

なんぢはぜん人なればきなんをまぬがれしめん間すこしも氣遣ふ事なかれとてかたをり紙二百枚かはせて家のぐるりをはりまはし扱家内共あんどしてふせり申べし夜の内にたとへいかなるこへがせふともかならずほかへ出る事無用なりとおしへられければ老人夫婦はたゞ有がたしとばかりよろこびおしへのごとくよより戸さして引こもりふしぬ

此夜かいたいあふれいで、にわかにな波天をひたし其こへらいていのごとく城垣房舎大なみにとられたゞよひ死する者いくばくといふかずをしらず風はげしうしてまどをうつ音物すさましくようくあかつきがたにいたる比風やみ夜の明るにしたがひ水も引らいせいもやみて後ゞばゞはしめて戸をあけて立出で、あたりを見るにそのきんへんの家一けんもなくゑんもかはらも行衛なくなりしに我家ばかりはのこりてすこしもそんずる事なしのりにてつけたる紙のいさ、かもぬれす有けるこそふしぎなれ

水災につきけんぶんの下司らまはり来りて此躰を見てふしぎはれず様(四オ) 子をき、て希異の事に思ひたんびしけると也あ、善人なるかな旅僧をくようせしんとかのむくひ也と人皆たつとびかんじける信心によりて大師の守り給ひけるにや

地蔵堂ぢざうどう妖まじ

嘉応かおうの比大仏おほきつ茂次兵もじべいへといふ剛勇かうゆうの士源平しげんへいすどのせんじやうに一度もおくる、事なくかうみやうてがらはかぞへつくしがたし茂次兵もじべいへいまだへやずみの折おりから東国を武者むしやしゆぎやうしてとうぞくを誅ちゆうしのふしあくとうばらをしたがへその中にもきりやうこつがらゆうりきある者を見立てなさをかけ手下てしたにつける事かずをしらすそのほか深山みやまのおく人とをき野はづれにてやゐんにあやしき者に出合へばさつそくひつとらへてきうめいしきつねたぬきのしやうたいをあらはさずといふ事なしその比下野しもつけの国に在る在所に地蔵堂ぢざうどうあるを見て堂守どうしゆのあんほうに断をのべて一宿しやしける火繩ひなわの火をともしてぶつぜんに御めんとひさをくみしきてたばこくゆらせいたるに長途あうとのつかれとろくといねふる内夜三更ないやさんげうのなかば(四)過んと思ふ比ひになやらんものをとのふとみ、に入りてあたりを見るにいづくともなくかさね畳たたみの上に平座へいざせるそくたいの人筋ひとぢに左右さゆうの手をそへもちてむねにあてたるが茂次兵もじべいへがたはらにあるを見ればどうたいばかりにてくびなし大仏おほきつは何が大へんなるおのこなればすこしもおそれさはぐ事なくにらみ詰つめていける処にふり袖そでのかた一方なくもよりそのかたの手もなき女出来いでるかた一方の足あしひざから下したなきやつこも出てけやりおとりをおとれば女もともに品やりておどりけるしばらくしてゑぼしのはんぶんちぎれた

萩坊奥路作『西行諸国断』翻刻と解題(速水)

るをちやくしたる武士くひばかりなる馬ばにまたがりいづる向むかふからかたはだぬぎしわか者ぬきかたなをさげてかけきたり此武者と渡りあひてた、かひける時さきのやつこは馬上の武者の下べと見へてかのわかものをさ、へてけやりにて打あひしがや、しばししやうぶをわかつたがひにつかれたりと見へて堂前どうまへのてうづばちにか、りごつふくと水のんでやすみいたる内東しらみになれば皆くゆきがたなくさへうせぬ

夜明あけて茂次兵もじべいへ(五)其あたりを見るに堂のうしろに土人形つちにんぎやうのかけそんじたるをすてありよく見れば夕べ見たる女のげけもの首くびなき天神てんじんさまゑぼしのをれた武者人形むしやじんぎやうやつこの人形すまふとり男おとこだて大仏おほきつつくく見て大にわらひ庵坊えんぼうに由よしをかたれば庵坊聞きていとしゆしやうらしくいかにもつともなかほして申は此在所ほうそうはやり小兒こにのしまけて死するものかずお、しそのもちあそびを地蔵へあげ置しをさうちの時とりのけしが扱はかの小兒共こにのうかみもやらでまよひ来るならんふびんの事に候はずやと打うなみだぐみ申しける時に茂次兵もじべいへからくとあざけりわらひ何条なにぢょうさる事あらんや某まがにまかせられよとはちまきしめてまるはだかに刀かたなをふんどしにさし堂だうの道家したやへはいりけるがものをとおびた、しくきこへはんじばかりして茂次兵もじべいへ大わらわになりてはいでるを見ればあたまのあげたる古狸ふるたぬきをはちまきをはづしてさるくつわにかまし刀のさげおにてきびしくしばり



(挿絵ウ) (富士山に西行の風呂敷づゝ、みは古き物がたりの新  
しくするなるべし／さて／き、しにまさるめいざ  
んじや／はるふじの景色)

両つかはすべしとかたらひければ曾七さつそくに心得たりと  
うけあひ夜ゐんに幸介何心なくゆく所を見かけ曾七はしりか、  
りて幸介を打たをす闇夜の事なればめくら打にしたるがいか、  
したりけん擧丸をした、かにうちていんふやぶれてたをれ死  
すしすましぬと死がいの人しれずうづみ置て立帰り丈兵へにか  
くと申せば丈兵へ悦びやくそくの通り銀子をつかはしける

曾七は生国豊前の者にて其後いとまをもらひ豊前へ帰り女房を  
もちて小みせをひかへ男子しゆつしやうしけるがすげつ有て其  
子いんのふの跡にどくさうでけて日夜さげびなきければ見るに  
たへかねいしやにたのみ葉をあたへけれ共しくしなくきねんき  
とう心のかぎりつくさずといふ事無れ共とかくにぢせず一年の  
内に大分のついへ有て少くたくはへありしもでもつき諸ど  
うぐもしろなしてようじやうにいれあげ今はあさゆふのいとな  
みもならずやれつゝれたるひとへもの一まいにてかんでんにこ  
たつもなくふるひいたり

あまりの事に子をいだきながら打なげきて申は我わか (七オ) き  
時たのまれて幸介をころしたるむくひにてかゝるうきめを見す  
るとはしられたり幸介のうらみもつともさる事とはいひながら

萩坊奥路作『西行諸国断』翻刻と解題 (速水)

我今此のごとくかげうをうしなひくるしむにいたりて思ひしり  
たれば此上はうらみをはらしおんでのがいしんをひるがへし  
て我をたすくるぢひしんも何とぞ有たき事なるにあまりといへ  
ば幸助しやうれうの心つよさよとなみだと共にかきくどきける  
にふしぎや二才にみたぬみどりこのおとなのいふがごとくたか  
らかなるこへにて申はなんぢ我に銀五十両をえて一ト打に幸介  
を打ころす我も又幸介がときくるしみをうけてすでにおと、  
しあいはてけるがすぐになんぢが子とむまれきたれり然れば此  
わざはひ幸介がしれる所にあらずといひおはりていんのふとん  
にはりさけうみちほどばしり出てついに死しければ曾七もおど  
ろきたをれて其暮かたなげき死にはかなくなる

其後家内をしまひけるいとこなりし者肥後へゆきてようすをた  
ちぎくに丈兵へは二年あまりまへかたにらんきに成りて刀をぬ  
き我とわがでにさしつらぬきみうちあき所なくすつけついに  
くるひ死 (七ウ) せしと聞て皆人したをまきておそれあへりとぞ

富士山詠

斯て西行はすげつ鎌倉に有て仙満君の御前にて古へ今のもの  
たり見さける事跡若君のごけうがく近習衆の心得になるべきこ  
と共をのべて和かんをひきて世法仏法のいんゑんこじをだんじ  
きかせける所へ南都俊乗坊よりひさつきたり此おもて大ぶつ

でんのさいこうくはんしん大かたにまんそくしけるよし申知ら  
せければ右大将家にぢし若君におんいとまごひきんしゆの衆  
ともなごりをおし鎌倉を出て夜を日につぎてしやうらくあり  
ける

名にしをふふじ山やまのふもとにつきてあれば折やぶからとそらはれて  
みどりなる高根たかねのけしき画図えずに写すともおよびなきぜつけい  
や、しばした、ずみ風呂敷ふろしきづ、みあをのけにそりかさあみだ  
になりてながめあかず立たいたり

聞ゆる和歌わがのめいしやうなれば心こころにうかび出でにまかせ

風かぜになびく富士ふじのけふりの空そらにきへてゆくへもしらぬ我わがた

びぢかな

かくなん打うぞんじてあとをとみければ是も雅人みやびと見へて四人づ  
れの旅人山りょんざんのけしきをなが（八才）め入り有しが此うたをき、て  
扱あくおもしろき御こと也とさんたんしければ西行さいぎやうおくゆかし  
く思おもひ其方そのかたにも定さだめて此こゝぜつけいにおもひより給ふことあるべし  
そと聞きせ給へと有あり四人詞よにんしをそろへ是はぞんじよらぬ御ことか  
な我われらは毎年まいねんぜんじやう致いたす者ものにて候まうがかつて左様さやうなるはしら  
ず候へと申まをす西行さいぎやう重かさねてさは有あまじひらに一首見しゆせ候へさもな  
くば只今ただいま見る所ところを当座かまによみてさかされよとのぞむに四人もこ  
まりてかたくちしけれどもゆるさなば詞ことばを同おなじふして申まをす我等われら  
かつて和歌わがのよみかなへ様さまをしらず候へば其そのぎは御ごめん下くださる

べし其代かみりに何なりとも此山このやまさうおうに大きな事を出まかせ  
につゞりて申まをさんといふ

西行さいぎやう悦よろこび夫おこぞ弥重やじゆうとのあいさついづれも小首こびをかたぶけいた  
りしが老人らうじんす、み出でてお僧そうさま申しこふもござらふか 狂歌きやうか

武蔵野むさしのにひろがるほどの梅うめにきてなげば雲井くもゐに羽はうつ鶯うら

と申まをせば西行さいぎやう扱あも大きな事ことを首尾しゆびしてよみかなへ給ふとほめ  
給ふ詞ことばの下したより壺人つぼにん

富士ふじを飯めしみほの海汗うみしせと外そとがはま足高山あしたかをさいに駿河路すまがち（八ウ）

是又こゝひとときはすぐれぎやうさんなりと西行さいぎやうよこ手てをうち給ふ

「破損」壺人の歌に

つむり天あまく眼まなこ日月にちげついきは風かぜはらは大海おほうみのどはかいどう

扱あは是も又出来またましたつむりてんく字余じよりのいつもしたけた  
かく聞へ申と西行さいぎやうのゑしやくに是にこしたる大なる事こともあらじ  
とおのくわらひどよみてやたて出してかきとめるに三首さんしゆの狂きやう  
哥かいづれもひとふしあんじ出し給ふ扱相あつかひのこりて御壺人ごつぼにんの秀作しゆうさく  
承うけりたしいかにやいかにといへはかぶりふりていやくいつれ  
もの御しゆかういたりつくせば又うへに何をか申さん此外このほかに大  
きなる事こと有あるべしと存ぞんぜずまして我われらがふかんにてはたとへの  
通り富士山ふじざんをせゝるかこゝろもちおよびも恋こひもたへて候へば是  
きりにしてやみなんはいかにと申す  
西行さいぎやうをはじめ皆くかつてゆるさずして申はたれ有ん和哥わがの



先達たる西行上人の御所望にてならひなき名山にてたぐひなき大なる狂哥をよむ四人の内に貴様一人よみ申されいで後に人の聞えも口おしくさんねんなればどのやうに成共して当座の間をあはされよと口／＼にの、しりせがみければ是非なく申はいか様御申の通り各方と一所に有ながら上人御所望の富士の狂哥にもれ候も残り多し然らば申て見候はんとさのみ（九才）あんじるてもなく先に書つらねたる狂哥のおくにつらくとよみした、め出しけるを見れば

天四海丸薬にしてのみたれば須弥滄海ものにさはらぬ

西行をはじめ皆／＼是を見ていやもふ是より大なる事はあらじさいぜんからおの／＼ふんこつをよみでられていづれをいづれとつきかねししう哥なる中にとりわき此哥大なるといひしゆかうと申しつゞけがら狂躰のくらいまで打そろひたる狂哥の天四海うちとさだめてさわりなしとたはふれながらしやうびかんぎんやまざる処ににわかにくろくもまいさがり雲の中よりひゞき渡るこへ有

夫程に丸じてのんだ身の我をのみのこすとはふしん千万言下に返し

たそやたそ腹のうちにてさ、やくは葉がすきかはりが所望か此哥に化生もゆきあたりてか雲ははるかにはれわたりぬ

夫より西行は四人の衆と同道にて浴をさしていそがれぬ西行上

人は建久九年二月に洛東双林寺のあんしつにて寂す頓阿の哥にむかしとそ又しのはる、跡恋しそのきさらぎの春の面

〔破損・影〕か

五卷大尾（九ウ）

（はやみ かおり・信州大学准教授）